

第49図 第10号住居跡出土遺物

第9表 第10号住居跡出土遺物観察表

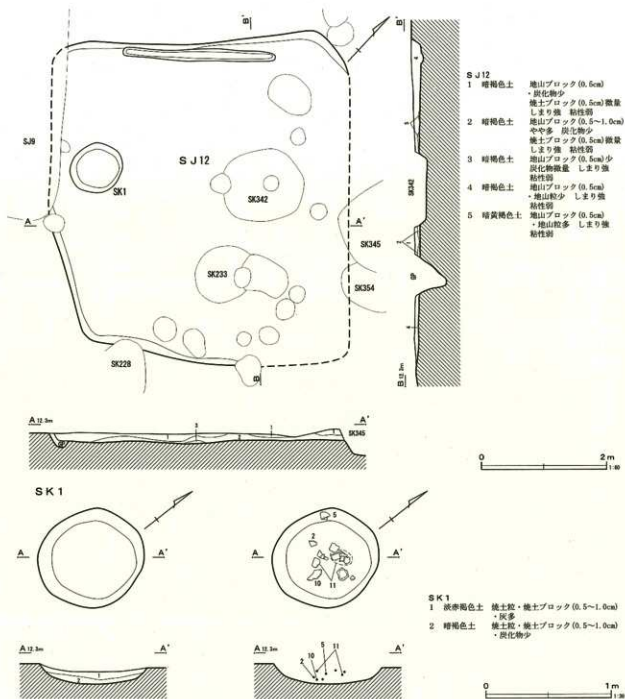
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ10	C	土師器	甕	30	(16.5)		[17.0]	A C F G	普通	灰黄		旧 SX20 №1
2	SJ10	C	土師器	甕	90	16.6		[14.0]	A B C D E F G	良好	灰黄褐		旧 SX20 №5
3	SJ10	C	土師器	高坏	25	(18.0)		[6.7]	A C D F G	普通	橙		旧 SX11 器面風化顕著
4	SJ10	C	土師器	碗	25	(11.4)		[7.0]	A B D F G	普通	にぶい 黄橙		旧 SX20 №2
5	SJ10	C	土師器	甕	40		6.3	[9.2]	C F	普通	橙		旧 SX20 №1・7 カマド
6	SJ10	C	土師器	甕	80		(6.0)	[6.5]	A C F H G	普通	灰褐		旧 SX20 №5
7	SJ10	C	土師器	甕	10	(24.4)		[2.8]	A C D F G	普通	にぶい 黄橙		掘り方 器面風化顕著 調整はみえない
8	SJ10	C	土師器	甕	45		(7.6)	[9.7]	A C D F I	普通	明赤褐		底部木葉痕
9	SJ10	C	土師器	甕	40	(19.2)	(6.2)	12.2	A C F G	普通	にぶい 橙		旧 SX20 №3-4

上がりが1箇所、東辺では壁溝が2条、南辺では3条、西辺では1条検出された。

3軒が重複している可能性も否定できないが、1軒の住居が東と南方向に拡張したのではないかと判断した。カマド2とした遺構は貯蔵穴を切っているのが確認できたため、貯蔵穴はカマド1と

した遺構とセット関係にあると推定される。この貯蔵穴は、東辺の内側の壁溝から距離があるためこの間に、北辺のように壁溝をもたない壁の立ち上がりがあったとも考えられる。

平面形は長方形である。東西規模は、内側の壁溝までで7.08m、外側までで7.98m。壁溝の規模

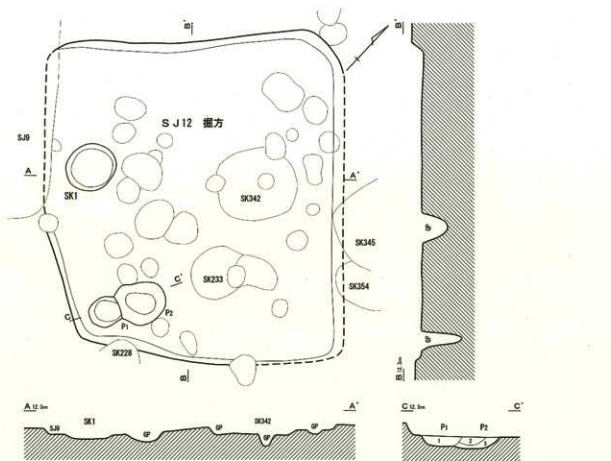


第50図 第12号住居跡・第1号土坑

は、内側で上場幅18~23cm、下場幅8~15cm、深さ5cm。外側で上場幅18~22cm、下場幅7~16cm、南北規模は、内側の壁溝までで5.53m、2本目までで6.92m、外側までで8.17m。壁溝の規模は、内側で上場幅13~18cm、下場幅5~10cm、深さ7cm、2本目で上場幅16~20cm、下場幅10~15cm、深さ10cm。外側で上場幅12~18cm、下場幅3~

10cm、深さ5cm。主軸方位はいずれの場合もN-57°-Eである。

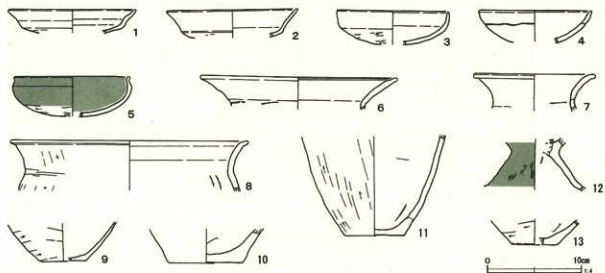
カマド残存部と推定した遺構は、ともに北壁に設けられている。袖部は遺存しておらず、燃烧部底面付近のみの確認であり、壁の切り込みはない。カマド1とした遺構の残存形態は、平面形が壁溝に近いものである。規模は147×34cm、深さは18



S J 12 ビット1・2

- 1 黒褐色土 地山較少
- 2 黒褐色土 地山較少 地山ブロック(0.5~1.0cm)やや多
- 3 暗褐色土 地山較・地山ブロック(0.5~1.0cm)少

第51図 第12号住居跡(掘方)



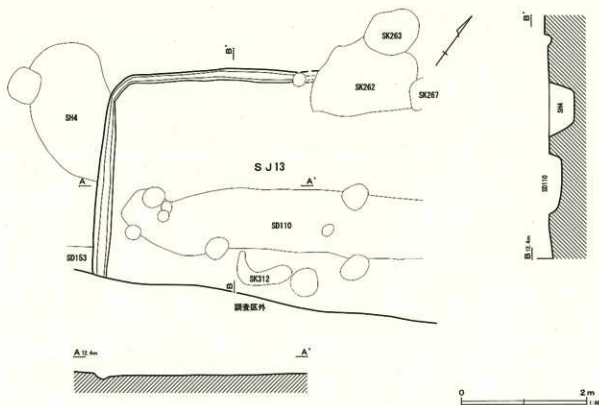
第52図 第12号住居跡出土遺物

第10表 第12号住居跡出土物観察表

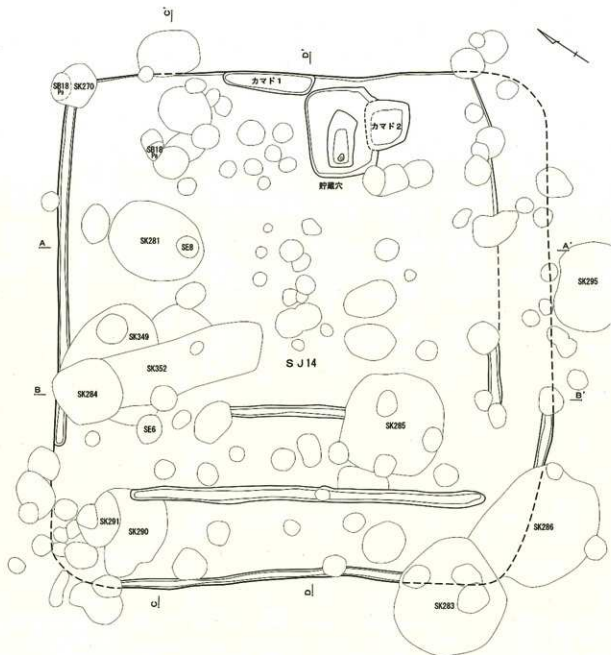
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ12	C	土師器	坏	10	(13.4)		[2.5]	A D G	普通	にぶい 橙		掘り方 器面風化顕著
2	SJ12	C	土師器	坏	10	(14.0)		[3.0]	A G	普通			SK1 No2 赤彩か 器面風化顕著
3	SJ12	C	土師器	坏	25	(11.8)		[3.7]	A D G H	普通	橙		掘り方
4	SJ12	C	土師器	坏	20	(11.8)		[3.5]	A F H	普通	橙		掘り方
5	SJ12	C	土師器	坏	50	(12.2)		[4.3]	A B C G	普通	明赤褐		SK1 No1 内外面赤彩 外面底部赤彩剥離か
6	SJ12	C	土師器	甕	15	(20.8)		[3.5]	G	普通	褐灰		掘り方 器面風化顕著
7	SJ12	C	土師器	壺	15	(13.0)		[4.0]	A C D G H	良好	にぶい 橙		掘り方
8	SJ12	C	土師器	甕	10	(24.6)		[5.2]	A G	普通	にぶい 褐		掘り方
9	SJ12	C	土師器	甕	40		(5.0)	[4.0]	A D G H	普通	暗褐		掘り方
10	SJ12	C	土師器	壺	70		(8.0)	[3.6]	A C D F	普通	明赤褐		掘り方 SK1 No5 器面風化
11	SJ12	C	土師器	甕	35	(6.0)	[10.5]	[10.5]	A D F G H	良好	にぶい 橙		掘り方 SK1 No4・7 SJ9 焼熱のため 重しく赤色化 器面風化顕著
12	SJ12	C	土師器	高坏	20			[5.3]	A B F G	普通	明赤褐		掘り方 外面赤彩
13	SJ12	C	土師器	甕	25		(4.8)	[2.7]	A B C D F	普通	にぶい 黄橙		掘り方 器面風化

cmである。カマド2とした遺構の残存形態は、平面形が隅丸方形で、規模は76×(72)cm、深さは19cmである。この住居跡に伴う貯蔵穴は確認されなかった。

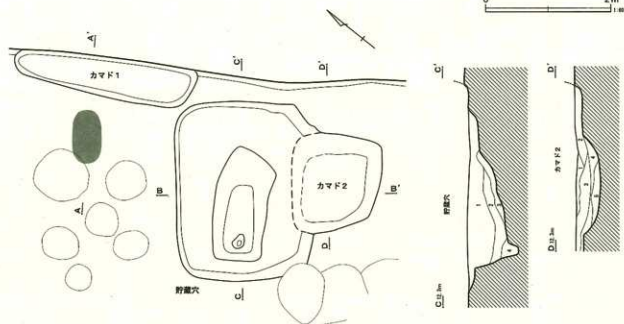
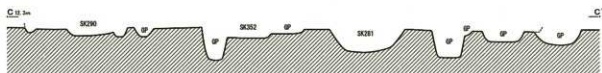
貯蔵穴は1基のみの確認である。平面形は隅丸長方形で、規模は143×108cm、深さは30cmである。本住居跡に伴うと考えられるピットは検出されなかった。



第53図 第13号住居跡



第54図 第14号住居跡 (1)



B J14 カマド1

- 1 黒褐色土 焼土粒(1.0cm)多 しまり強
- 2 暗褐色土 焼土粒(0.5cm)・ローム粒(0.3~0.5cm)少 しまり強
- 3 暗褐色土 ローム粒(0.5cm)多

カマド2

- 1 暗褐色土 ローム粒(0.2cm)・焼土粒(0.3cm)少 しまり強 粘性弱
- 2 黒褐色土 ロームブロック(1.0cm)少 しまり強 粘性弱
- 3 暗褐色土 1層を主体 ロームブロック多 しまり強 粘性弱
- 4 黒褐色土 黄褐色土ブロック(0.2cm)やや多 1.5cm(少) 灰化層(0.2~0.5cm)やや多
- 5 黒褐色土 黄褐色土ブロック(0.2cm)やや多 1.0~1.5cm(多) 灰化層(0.2~0.3cm)・焼土粒(0.2cm)やや多

貯蔵穴

- 1 暗褐色土 ローム粒(0.2~0.3cm)多 焼土粒(0.3cm)少 しまり強 粘性弱
- 2 暗褐色土 ローム粒(0.1cm)少 焼土粒(0.3cm)極少 しまり強 粘性弱
- 3 暗褐色土 ロームブロック(3.0~5.0cm)多 しまり強 粘性弱
- 4 暗褐色土 ロームブロック(3.0cm)多 しまり強 粘性弱

第55図 第14号住居跡(2)



第56図 第14号住居跡出土遺物

第11表 第14号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SJ14	C	土師器	坏	15	13.2		[2.4]	B C D F G	普通	橙		一括 内外面赤彩
2	SJ14	C	土師器	甕	20	(16.1)		[7.1]	A B F	普通	にぶい黄褐色		西側周溝 器面風化顕著 調整は殆どみえない
3	SJ14	C	土師器	台付甕	50			[2.9]	A C D G H	普通	褐灰		被熱により濃しく赤色化 器面は陥んでいる
4	SJ14	C	土師器	壺か	30		(6.0)	[1.5]	A B C F J	普通	橙		貯蔵穴 器面風化顕著 調整はみえない

出土した遺物は、土師器の坏・甕等、計4点(1～4)である。住居跡の時期は、7世紀第1四半期と推定される。

第15号住居跡 (第57図)

L-8グリッドに位置する。1つのピットを切っているほかは、重複するすべての遺構に切られていると推定される。

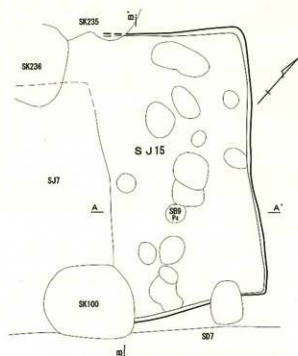
西部はプランが失われていた。規模は、南北

は4.55m、東西は2.15mまでの確認である。確認面からの深さ5cm、主軸方位はN-42°-EもしくはN-48°-Wである。カマドや貯蔵穴・ピット・壁溝等は検出されなかった。

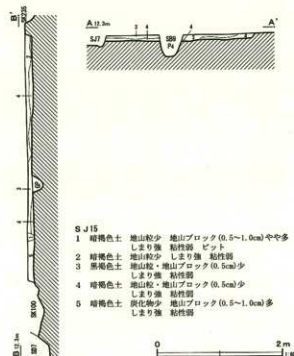
遺物は出土しなかった。

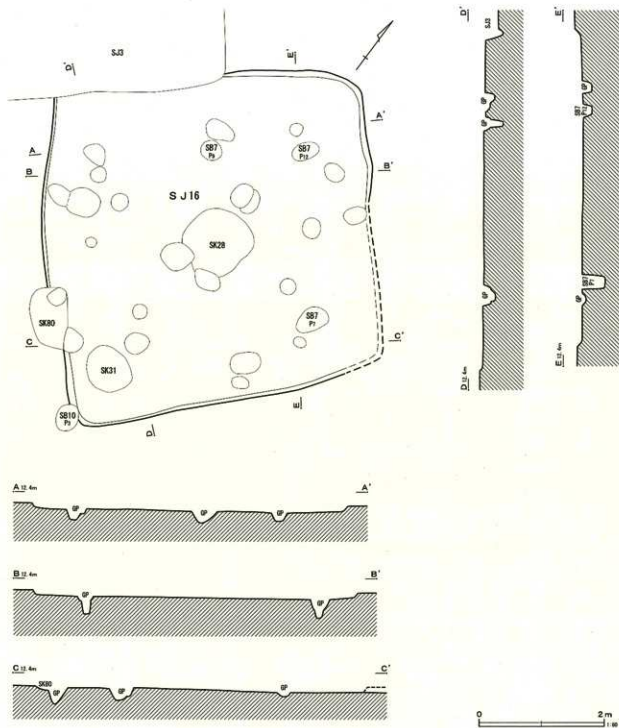
第16号住居跡 (第58図)

J-9・10グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると推定される。平面形は



第57図 第15号住居跡





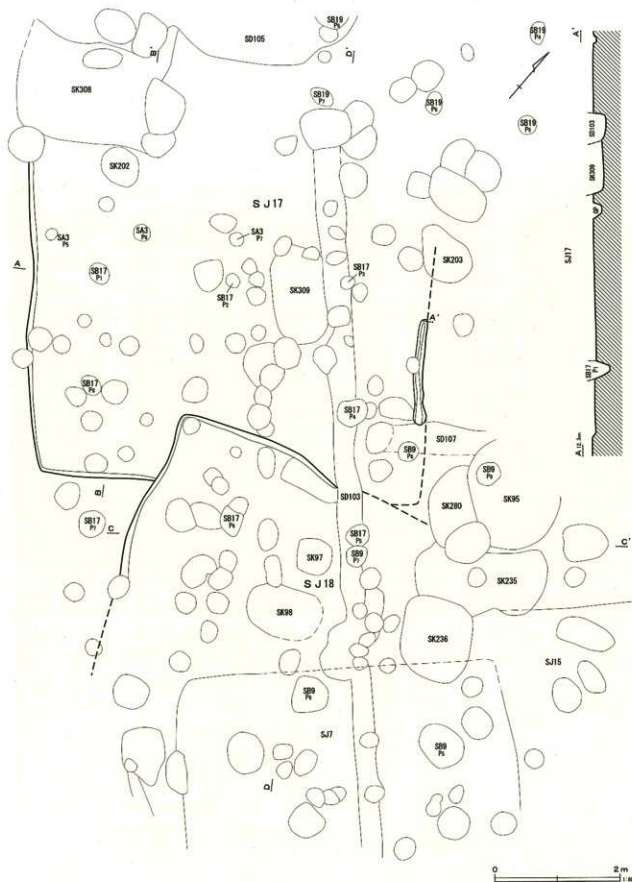
第58図 第16号住居跡

歪んだ長方形である。住居跡の規模は、東西5.32 m、南北5.18 m、確認面からの深さは5~10 cmである。主軸方位は、N-50°-EもしくはN-40°-Wと推定される。カマド・貯蔵穴・溝・ピット等は検出されなかった。

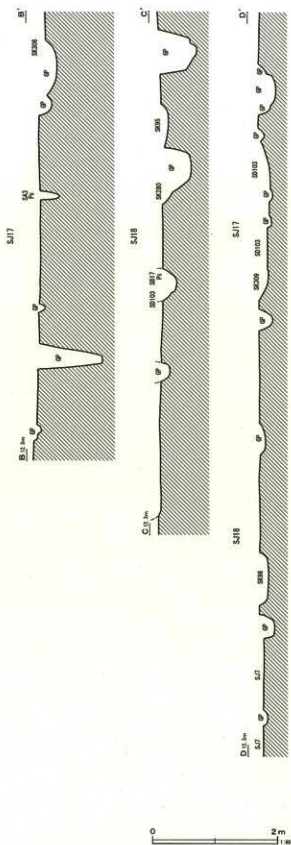
攪乱部分の覆土中から、瀬戸・美濃系の碗(18 C)と灯明皿(19C前半)の陶器の小破片が出土した。

第17号住居跡(第59・60図)

L-7・8グリッドに位置する。遺構の遺存度



第59図 第17・18号住居跡(1)



第60図 第17・18号住居跡(2)

が最も低い地点に相当していることから、プラン確認は困難であった。そのため、調査段階では性格不明遺構としたが、整理作業の段階で住居跡として扱うこととした。第18号住居跡とした遺構も、調査段階では性格不明遺構としたものである。第18号住居跡も含めて、重複するすべての遺構との新旧関係は確認できなかった。

西・南側の直線状の立ち上がりと、直角に近いコーナー部分と東側の溝跡から、それぞれ西・南側の壁面と東側の壁溝と判断した。規模は、東西6.38mであるが、南北は4.93mまでの確認である。確認面からの深さは5~8cmである。壁溝は、長さ1.68m、上場幅14~22cm、下場幅3~12cm、深さ5cmである。主軸方位は、N-48°-EもしくはN-42°-Wと推定される。カマド・貯蔵穴・ピット等は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第18号住居跡 (第59・60図)

L-7・8グリッドに位置する。遺構の遺存度が最も低い地点に相当していることから、プラン確認は困難であった。そのため、調査段階では性格不明遺構としたが、整理作業の段階で住居跡として扱うこととした。第17号住居跡とした遺構も、調査段階では性格不明遺構としたものである。

第17号住居跡も含めて、重複するすべての遺構との新旧関係は確認できなかった。西・北側の直線状の立ち上がりと、ほぼ直角に近いコーナー部分から、それぞれ西・北側の壁面の一部が遺存した住居跡の北西コーナー部分であると判断した。規模は、東西2.72mであるが、南北は2.74mまでの確認である。確認面からの深さは3~5cmと極めて浅い。主軸方位は、N-72°-EもしくはN-18°-Wと推定される。カマド・貯蔵穴・ピット・壁溝等は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

3. 周溝状遺構

検出された周溝状遺構は11基であり、いずれもA区で確認されている。溝の幅が狭いこと、浅いこと、そして平面形などからみて方形周溝墓とは考えにくいものを周溝状遺構と判断した。周溝に囲まれた空地には、周溝状遺構に伴うピットが存在する可能性があるが、特定できないため本項では扱わないこととした。すべての周溝状遺構の時期は、古墳時代前期であると推定される。

第1号周溝状遺構 (第62・65図)

F・G-13・14グリッドに位置する。本遺構の、西側部分のみが遺存した結果と考えられる。ほかの遺構との重複関係はない。周溝の規模は、残存長12.3m、上場幅1.32~1.72m、下場幅0.80~0.88m、深さ0.48~0.56m、溝の方位はN-15°-Eである。平面形は直線に近いが、西側に緩やかに湾曲する。断面形は概ね逆台形で、底面は比較的平坦である。遺存範囲から、南側が開くと考えられる。

攪乱部分の覆土中から、陶器の挿針(1)の小破片が出土した。

第2号周溝状遺構 (第63・65図)

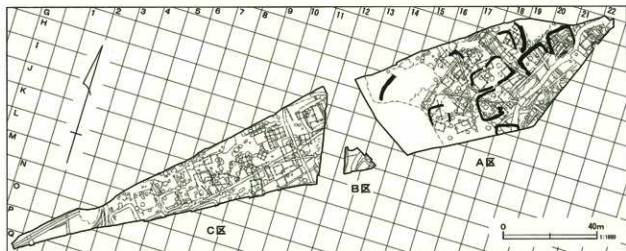
A-20、B-19~21、C-20グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると考えられる。全体的な平面形は隅丸長方形で、規模は南西-北東の外法11.52m、内法9.64m、北西

-南東の外法10.88m、内法8.69m、長軸方位はN-53°-Eである。周溝の規模は、西溝で上場幅1.00~1.36m、下場幅0.80~0.96m、深さ0.16~0.28m、南溝で上場幅1.12~1.44m、下場幅0.72~1.04m、深さ0.20~0.40m、東溝で上場幅0.48~0.72m、下場幅0.32~0.56m、深さ0.20m、北溝で上場幅0.88~1.00m、下場幅0.56~0.92m、深さ0.24m。南側が開くと考えられる。周溝の断面形はいずれも概ね逆台形で、底面は比較的平坦である。

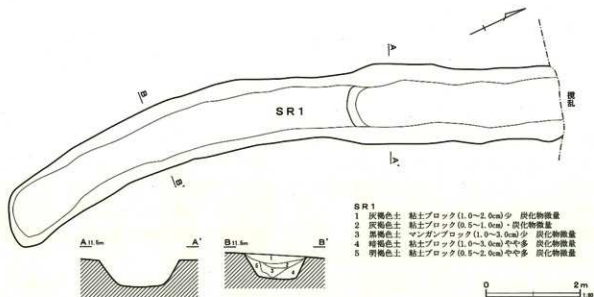
土師器の台付甕(2)と、攪乱部分の覆土中から磁器小坏(3)が出土した。

第3号周溝状遺構 (第64・65図)

B-19、C-19・20、D-19グリッドに位置する。東溝は、第17号溝跡によって失われ、重複するすべての遺構に切られていると考えられる。本遺構の外法13.68m、内法11.40m。東溝が第17号溝跡に切られているとするならば、東西の外法9.28m程、内法6.30m程と推測される。平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-30°-Eである。周溝の断面形は逆台形で、底面は比較的平坦である。周溝の規模は、北溝で上場幅1.12~1.36m、下場幅0.72~0.80m、深さ0.44m、西溝で上場幅1.52~1.68m、下場幅1.08~1.32m、深さ0.44~0.52m、南溝で上場幅0.88~2.02m、下場幅0.41



第61図 周溝状遺構分布図



第62図 第1号周溝状遺構

~1.12m、深さ0.20~0.52m。南溝に、幅0.24m程の開口部が認められた。また北溝の東寄りには窪みが認められた。

土師器の台付甕(4)と坏(5)が出土した。

第4号周溝状遺構(第66・67図)

B-18・19、C-19グリッドに位置する。本遺構の、東側部分と推測される。重複するすべての遺構に切られていると考えられるが、内側(西側)に位置する第6号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。周溝の規模は、残存長13.28m、上場幅1.44~2.04m、下場幅1.16~1.28m、深さ0.32~0.36m、溝の方位はN-21°-Wである。平面形は直線状であるが、東側に緩やかに湾曲する。周溝の南半部に窪みをもつ。周溝の断面形は概ね逆台形で、底面は比較的平坦である。遺存範囲から、南側が開口すると考えられる。

図化できた遺物は7点(1~7)である。

第5号周溝状遺構(第68・69図)

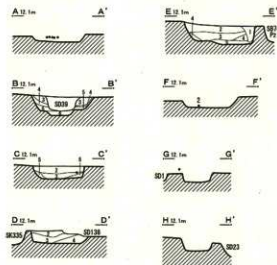
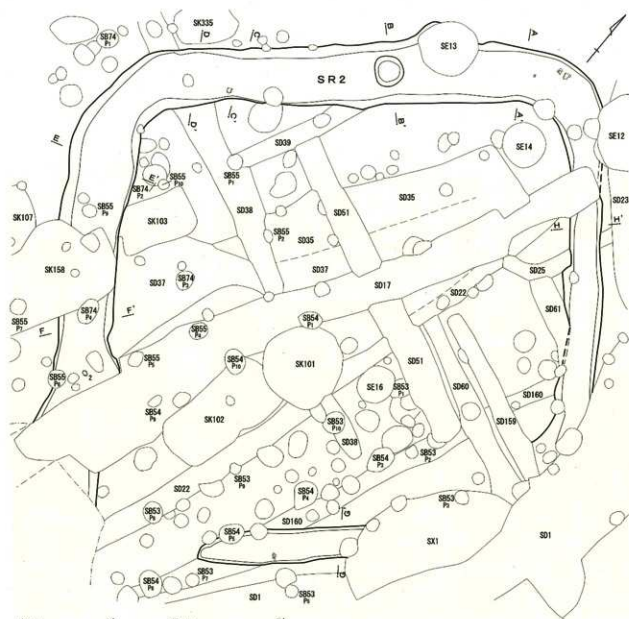
E-17・18、F-17~19グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると考えられる。北溝東端部は第19号井戸跡に切られている。その先は確認されていないことから、井戸の範囲内で収まっていると推測され、東側が開口してい

ると考えられる。全体的な平面形は隅丸長方形で、北溝は東溝よりも東に延びており、垂んだ形状になっている。規模は北西-南東の外法12.08m、内法9.84m、南西-北東の外法9.92m、内法7.20m、長軸方位はN-40°-Wである。周溝の断面形は概ね逆台形で、底面は比較的平坦である。周溝の規模は、北溝で上場幅0.80~1.28m、下場幅0.32~0.64m、深さ0.36m、西溝で上場幅0.56~0.96m、下場幅0.40~0.68m、深さ0.40~0.48m、南溝で上場幅0.84~1.28m、下場幅0.60~0.96m、深さ0.16~0.24m、東溝で上場幅1.08~2.12m、下場幅0.88~1.84m、深さ0.24m。開口部に近い東コーナーから比較的土器がまとまって出土しているが、いずれも遺存度は低い。攪乱土中から煙管が出土した。

図化できた遺物は14点(1~14)である。

第6号周溝状遺構(第70図)

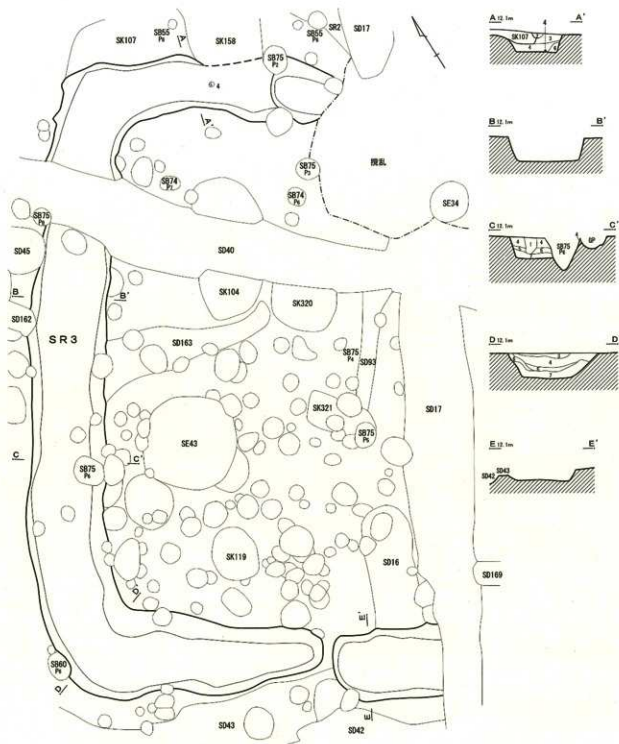
B-17・18、C-18グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると考えられるが、第4号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。北溝と西溝のみが確認されたが、極めて浅いことから、部分的に失われている可能性もある。全体的な平面形は「L」字状、断面形は逆台形で、



- SR 2
- 1 暗褐色土 黄褐色粘土(1.0cm)やや多 ビット
 - 2 黒褐色土 黄褐色粘土(0.5cm)多
 - 3 黒褐色土 黄褐色粘土(0.2~0.3cm)・褐色粘土(0.3cm)少
 - 4 暗褐色土 黄褐色粘土(0.5cm)・褐色粘土(0.5cm)多
 - 5 黒色土 黄褐色粘土(0.2cm)やや多
 - 6 暗褐色土 黄褐色粘土(0.5cm)やや多



第63図 第2号周溝状遺構

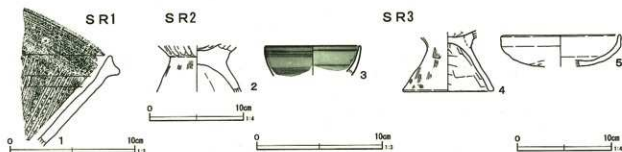


SR 3

- 1 埴粉色土 埴粉色粘土粒(0.1cm)微量 ビット
- 2 暗灰色土 褐色粘土(0.2~0.4cm)少 ビット
- 3 暗褐色土 褐色粘土粒(0.2cm)多
- 4 赤褐色土 褐色粘土粒(0.2~0.7cm)少 灰褐色粘土粒(0.7cm)微量
- 5 赤褐色土 黄褐色粘土粒(0.2~0.4cm)多 灰褐色粘土粒(0.2~0.4cm)やや多
- 6 赤褐色土 黄褐色粘土粒(0.2~1.0cm)多 黒色土ブロック(1.0cm)やや多
- 7 黒色土 黄褐色粘土粒(0.2~0.5cm)多 黄褐色粘土粒(3.0~5.0cm)・褐色粘土粒(0.2cm)やや多



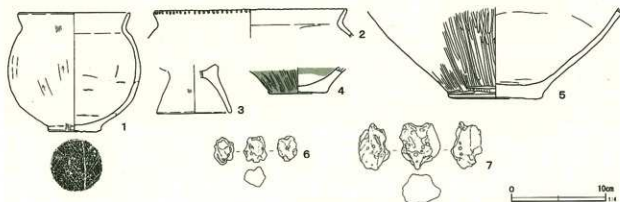
第64図 第3号周溝状遺構



第65図 第1～3号周溝状遺構出土遺物

第12表 第1～3号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SR1	A	陶器	鉢鉢	10			[7.2]	A G	普通	灰		内外面鉄繪 印目6本/条 丹波系 18C 前葉か
2	SR2	A	土師器	台付甕	80			[5.1]	A B C D F G	普通	にぶい 赤褐		No2 器面風化
3	SR2	A	磁器	小坏	20	(7.6)		[3.3]	A G	普通	灰白	轆轤	内外面透明釉 気泡有 胎付 外面口縁3本指線 裏6本指線 内面口縁・見込み一重指線 瀬戸・美濃系 19C 代
4	SR3	A	土師器	台付甕	90		9.7	[6.5]	A C F	普通	にぶい 橙		No1
5	SR3	A	土師器	坏	40	(12.8)		[3.3]	A G	普通	橙		器面風化顕著 調整はみえない



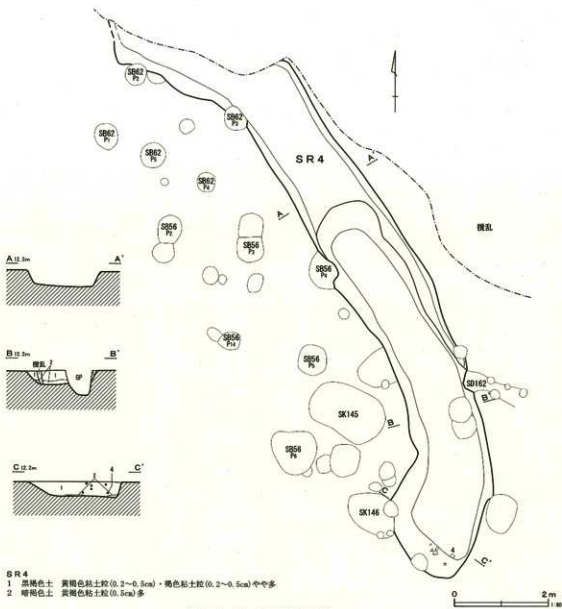
第66図 第4号周溝状遺構出土遺物

第13表 第4号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SR4	A	土師器	壺	35	(11.9)	5.6	12.6	A B C D F G	普通	橙		底部落葉痕
2	SR4	A	土師器	甕	15	(20.2)		[2.0]	A C D F G	普通	にぶい 橙		器面風化顕著 調整痕は殆どみえない
3	SR4	A	土師器	台付甕	70		7.9	[5.3]	A C F G	普通	橙		器面風化顕著
4	SR4	A	土師器	壺	75		5.8	[2.7]	A D F	普通	にぶい 橙		No6 内面一部・外面赤彩
5	SR4	A	土師器	壺	30		10.0	[9.6]	A D F G	普通	灰褐		
6	SR4	A	貝塚穴痕泥岩			長さ2.9cm 重さ5.9g	幅2.2cm	厚さ2.0cm			にぶい 橙		10孔 被熱による赤色化弱
7	SR4	A	貝塚穴痕泥岩			長さ4.9cm 重さ29.0g	幅4.1cm	厚さ3.0cm			にぶい 橙		30孔 細かい孔が多い 被熱による赤色化弱

底面は比較的平坦である。周溝の規模は、残存長 9.20m、上場幅0.76～1.08m、下場幅0.48～0.88m、深さ0.12～0.28m。溝の長さは、北溝8.10m、

西溝4.70m。方位は北溝がN-35°-W、西溝N-55°-Eである。遺物は出土しなかった。



第67図 第4号周溝状遺構

第7号周溝状遺構 (第71・75図)

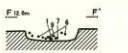
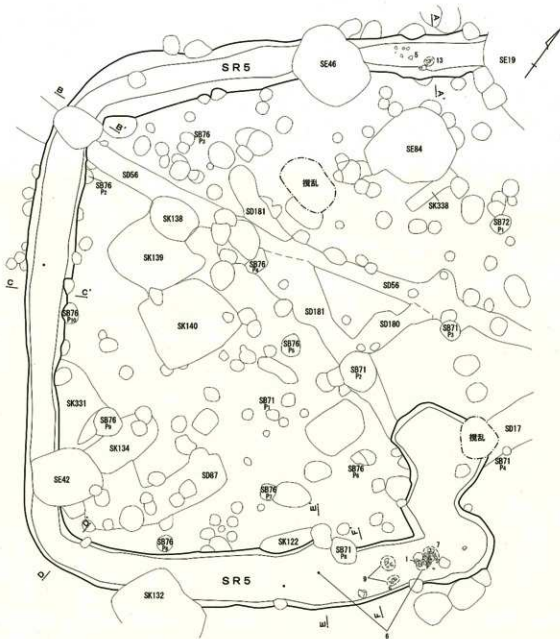
C-18、D-17~19、E-18グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると考えられるが、第8号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。全体的な平面形は隅丸の「コ」の字状で規模は北西-南東の外法11.60m、内法9.20m、南西-北東の内法8.08m、長軸方位はN-70°-Wである。周溝の断面形は概ね逆台形で、底面は比較的平坦である。周溝の規模は、西溝で上場幅0.56~1.12m、下場幅0.24~0.80m、深さ0.40~0.44m、東溝で上場幅[1.44]m、下場

幅1.28m、深さ0.24m、北溝で上場幅0.76m、下場幅0.56m、深さ0.28m。

土師器の甕(1)・壺(2)が出土した。

第8号周溝状遺構 (第72・75図)

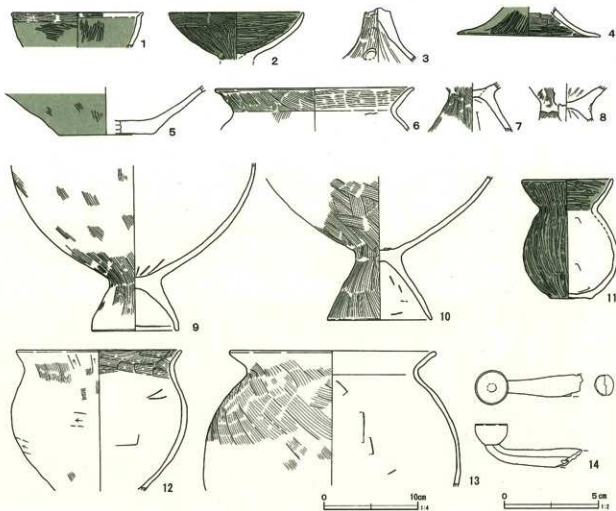
D-17、E-17・18グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると考えられるが、第7号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。全体的な平面形は隅丸の「コ」の字状で、北側と、南側の一部が途切れる。後者の幅は3.44mである。周溝の断面形は概ね逆台形で、底面は比較的平坦である。全体の規模は、北西-南東の



- SR 5
- | | | | |
|---|------|--------------------------|-----|
| 1 | 褐色土 | 黄褐色粘土ブロック少 | ピット |
| 2 | 赤褐色土 | 黄褐色粘土粒(0.5~1.0cm)を均質に少 | |
| 3 | 赤褐色土 | 黄褐色粘土粒(0.5~1.0cm)多 | |
| 4 | 赤褐色土 | 黄褐色粘土ブロック(0.5~5.0cm)多 | |
| 5 | 黄褐色土 | 黄褐色粘土層中に赤褐色土(0.5~0.8cm)少 | |
| 6 | 褐色土 | 黄褐色粘土ブロック(0.2~0.3cm)少 | |
| 7 | 暗褐色土 | 炭土粒・炭化物粒・ブロック多 | |
| 8 | 黄褐色土 | 黄褐色粘土ブロック(0.3~0.5cm)少 | |
| | | 粘土層 | |



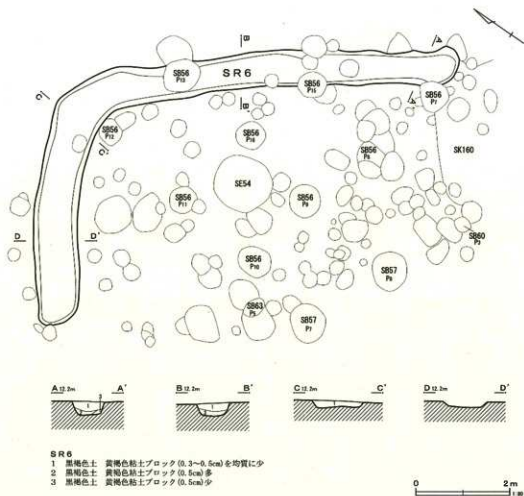
第68図 第5号周溝状遺構



第69図 第5号周溝状遺構出土遺物

第14表 第5号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SR5	A	土師器	坏	40	(14.0)		[3.8]	A D F G	良好	にぶい赤褐色		No18 内外面赤彩
2	SR5	A	土師器	高坏	85	14.4		[5.0]	A B C D F G	普通	にぶい橙		内外面赤彩
3	SR5	A	土師器	高坏	80			[5.7]	A C D F G	良好	灰褐色		F-18G 外面へラ磨き
4	SR5	A	土師器	高坏	50		15.0	[3.1]	B C F	良好	橙		F-18G 外面赤彩 器面風化
5	SR5	A	土師器	壺	25	(10.0)		[5.0]	A C D F G	普通	にぶい赤褐色		No4 外面赤彩か 器面風化顕著
6	SR5	A	土師器	台付甕	20	(21.0)		[4.6]	A D F G	普通	灰黄		No13 F-18G No19 外面煤付着
7	SR5	A	土師器	台付甕	70			[5.2]	A C G	普通	明赤褐色		No23
8	SR5	A	土師器	台付甕	90			[3.8]	A C D F G H	良好	にぶい赤褐色		No11 刷毛を施した後粘土貼付 刷毛が見える部分は刷毛付した粘土がはがれた部分
9	SR5	A	土師器	台付甕	40	(9.2)	[17.7]		A B C D F G	普通	にぶい赤褐色		No16-17 F-18-19G 器面厚膜 調整痕ほみえづらい
10	SR5	A	土師器	台付甕	60		11.2	[15.2]	D F G	良好	灰褐色		F-18G No10 D-17G P45
11	SR5	A	土師器	小型壺	75	(9.6)	4.4	12.6	A B C D G	普通	にぶい赤褐色		内面口縁部・外面赤彩
12	SR5	A	土師器	台付甕	40	(17.6)		[14.6]	A D F G	普通	灰赤		F-18-19G へラ削り後へラナード一部ハア
13	SR5	A	土師器	甕	25	(21.8)		[14.3]	B C D G	普通	にぶい橙		No3 E-18G
14	SR5	A	青銅製品	樽管 扉首		長さ5.7cm 内径1.7cm	高さ2.2cm 外径1.1cm	火面長1.1cm 外径1.4cm					E-18G 緑錆をふく 18C 前半か



第70図 第6号周溝状遺構

外法9.44m、内法8.01m、南西-北東の外法7.60m、内法6.88m、深さ0.20~0.28m。長軸方位はN-40°-Wである。

土師器の台付甕(3)が出土した。

第9号周溝状遺構(第73・75図)

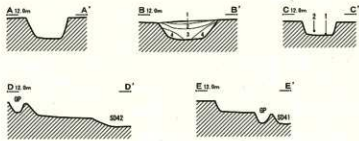
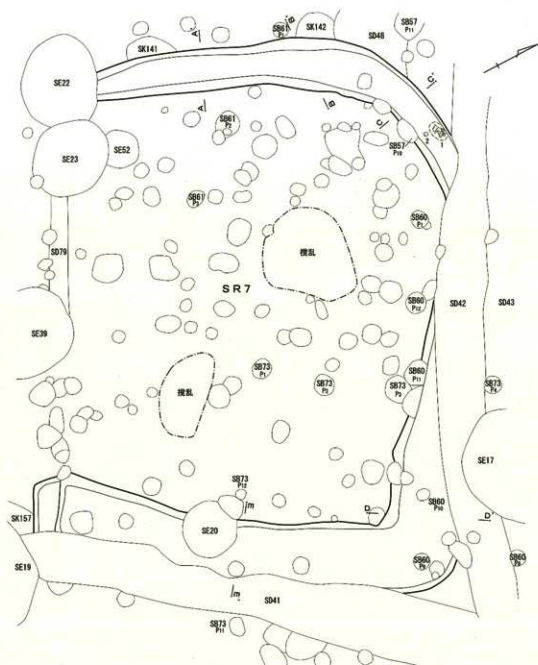
D-16グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると考えられる。全体的な平面形は「L」字状であるが、周溝が極めて浅いことから部分的に失われている可能性もある。周溝の断面形は逆台形で、底面は比較的平坦である。周溝の規模は、北溝で上場幅0.64~0.84m、下場幅0.48~0.56m、深さ0.24m、西溝で上場幅1.04~1.36m、下場幅0.72~1.12m、深さ0.20m、方位は北溝がN-58°-W、西溝が、N-32°-E

である。

土師器の甕(4)と揺鉢(5)が出土した。

第10号周溝状遺構(第74・75図)

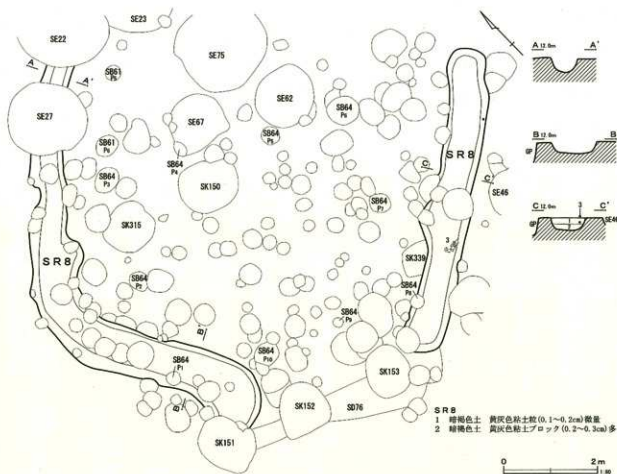
F-16、G-16・17グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られていると考えられる。全体的な平面形は隅丸の「コ」の字状で、南側が開口する。規模は南西-北東の外法8.75m、内法7.40m、北西-南東の外法[8.00]m、内法[7.20]m、長軸方位はN-60°-Eである。周溝の断面形は概ね逆台形で、底面は比較的平坦である。周溝の規模は、北溝で上場幅0.72~0.88m、下場幅0.40~0.56m、深さ0.32m、西溝で上場幅0.56~0.88m、下場幅0.32~0.56m、深さ0.32m、東溝で上場幅0.56~0.64m、下場幅0.24~0.40m、深



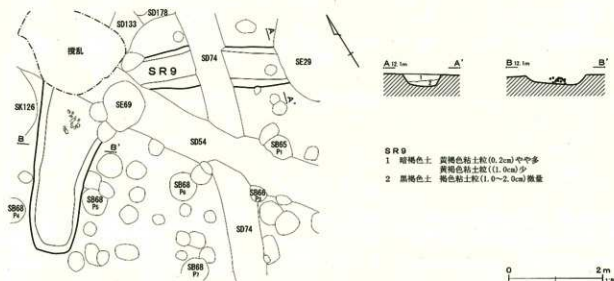
- SR 7
- 1 灰褐色土 黄褐色粘土層
 - 2 暗褐色土 粘土質・炭化物粒少
 - 3 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック(0.2~0.3cm)を均質に少
 - 4 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック(0.5~0.8cm)多



第71図 第7号周溝状遺構



第72図 第8号周溝状遺構



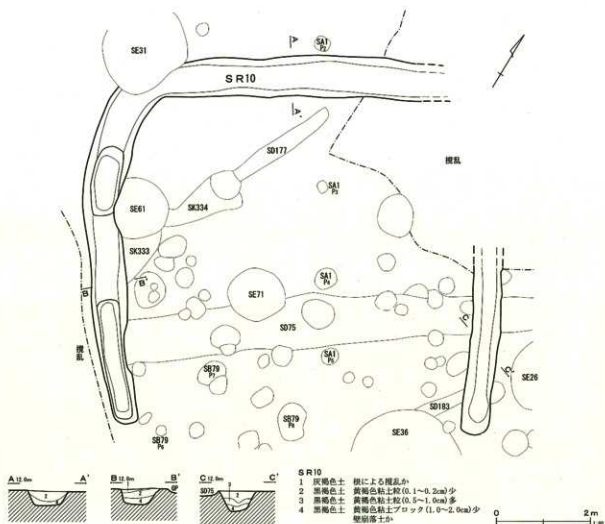
第73図 第9号周溝状遺構

さ0.44mである。

第11号周溝状遺構 (第76図)

土師器の高弁 (6) が1点出土した。

F-18・19、G-19グリッドに位置する。第64



第74図 第10号周溝状遺構

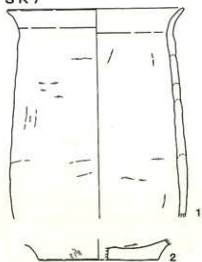
第15表 第7~10号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SR7	A	土師器	甕	40	(18.6)		[22.2]	A C D F G	普通	にぶい赤褐色		旧SD43 No1 C-18G 外面被熱による赤色化顕著 器面風化顕著
2	SR7	A	土師器	壺	50		(12.6)	[2.1]	A C D F G	普通	灰黄		旧SD49 No1 器面風化顕著
3	SR8	A	土師器	台付甕	45	(20.2)	8.2	26.8	A B C D F G	普通	灰褐色		No1
4	SR9	A	土師器	甕	20	(20.8)		[10.3]	A C D F G	普通	灰黄		
5	SR9	A	陶器	播鉢	10	(25.4)		[11.4]	A G J	良好	灰黄	轆轤	鉄輪 即日7本/条 瀬戸・美濃系18C後半か
6	SR10	A	土師器	高坏	30			[2.4]	A D F G	普通	赤褐色		内外面赤彩 内面へう磨き

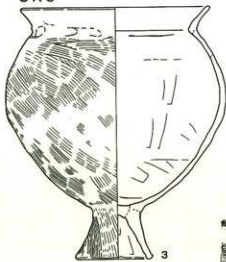
号溝跡を切り、ほかの遺構には切られている。南側は調査区外に続く。確認範囲で、平面形は「L」字状である。周溝の規模は、上場幅0.80~0.88m、下場幅0.50~0.80m、深さ0.20~0.40m。溝の方

位は北溝N-70° - E、西溝N-20° - Wである。断面形は逆台形で、底面は比較的平坦である。遺物は出土しなかった。

SR7



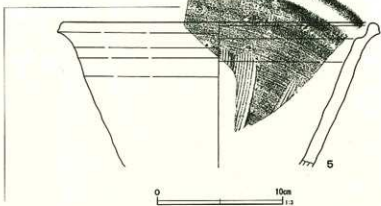
SR8



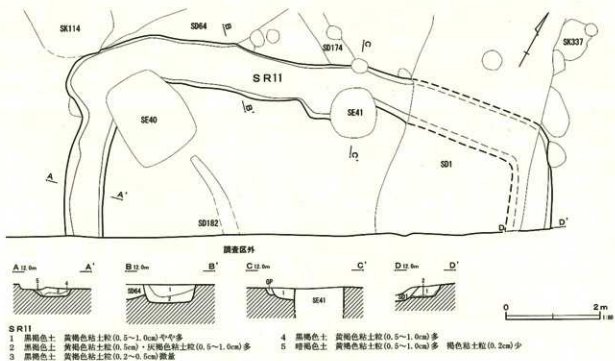
SR9



SR10



第75图 第7~10号周满状遗構出土遺物



第76图 第11号周满状遺構

4. 方形周溝墓

検出された方形周溝墓は6基であり、いずれもC区で確認されている。

第1号方形周溝墓（第78～80図）

G-11、H-10・11、I-10・11グリッドに位置する。北辺については、第276・277号土壌に切られているためプランが失われていたが、4辺からなる方形周溝墓であると考えられる。

北東コーナー周辺は、調査区外である。第2号方形周溝墓との距離は9.40mである。覆土は自然堆積で、遺構確認面や土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。

本周溝墓全体の平面形は、周溝も方台部ともに直線的な、南西-北東方向に長い長方形である。周溝を含めた全体の規模は、北西-南東11.60mで、南西-北東は13.68mまでの確認である。方台部の規模は、北西-南東8.40m、南西-北東11.70m、長軸方向N-44°-Eである。西溝は上場幅1.30～1.72m、下場幅0.62～1.02m、深さ0.45～0.50m、断面形は概ね逆台形。南溝は上場幅1.36～1.92m、下場幅0.80～1.12m、深さ0.30～0.38m、断面形は概ね逆台形。東溝は上場幅1.20～1.44m、下場幅0.78～1.00m、深さ0.38～0.52m。全体的に周溝の立ち上がりは、外周側よりも方台部側のほうが急である。

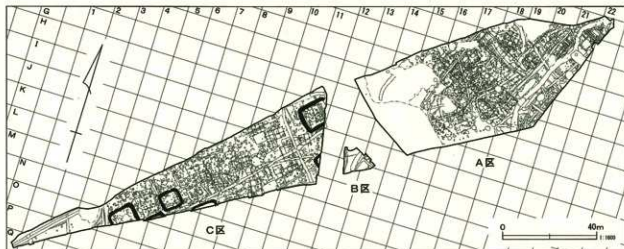
遺物は西側コーナーと、南側コーナー近くから出土している。環6点も含め、図化できた遺物は11点（1-11）である。

第2号方形周溝墓（第81・82図）

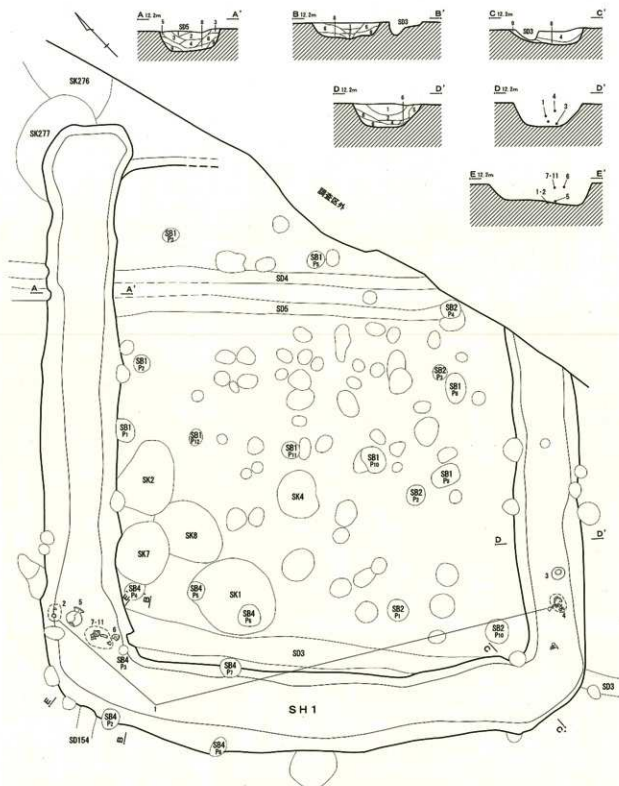
J-11・12グリッドに位置する。西側コーナーのみの検出であり、そのほかは調査区外である。重複するすべての遺構に切られている。第1号方形周溝墓との距離は9.40mである。覆土は自然堆積で、遺構確認面や土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。

検出範囲内では、周溝も方台部も直線的に近いといえる。あえて計測するならば、主軸方位N-29°-E、またはN-61°-Wである。周溝の規模は、西溝が上場幅0.98m、下場幅0.36～0.49m、深さ0.60～0.75m、断面形は概ね逆台形。南溝は上場幅1.20～1.58m、下場幅0.55～0.60m、深さ0.53～0.73m。全体的に周溝の立ち上がりは、外周側も方台部側も近いが、方台部側のほうが急な例もみられる（A-A'）。

コーナー部分付近で、底面から30cm程浮いた状態で、焼成後に底部穿孔された壺と破片の2点（1・2）が出土した。この壺は、方台部から転落したものであるのか、中層まで埋没した段階で据え置かれたものかは特定できなかった。



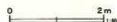
第77図 方形周溝墓分布図



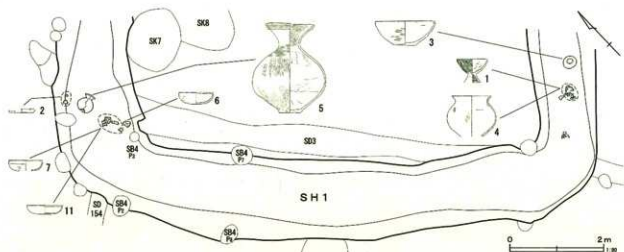
SH 1

- 1 灰黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック多
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック・黄褐色土粒主体層
- 3 灰褐色土 均質な灰色土
- 4 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体層
- 5 黄褐色土 黄褐色土多
- 6 黒褐色土 黄褐色土少 しまりやや強
- 7 黒褐色土 黄褐色土粒微量 土粒少 しまり強
- 8 灰黒褐色土 黄褐色土・黒色土やや微文状に少
- 9 灰黄褐色土 黄褐色土多 黒色土少 しまりやや強

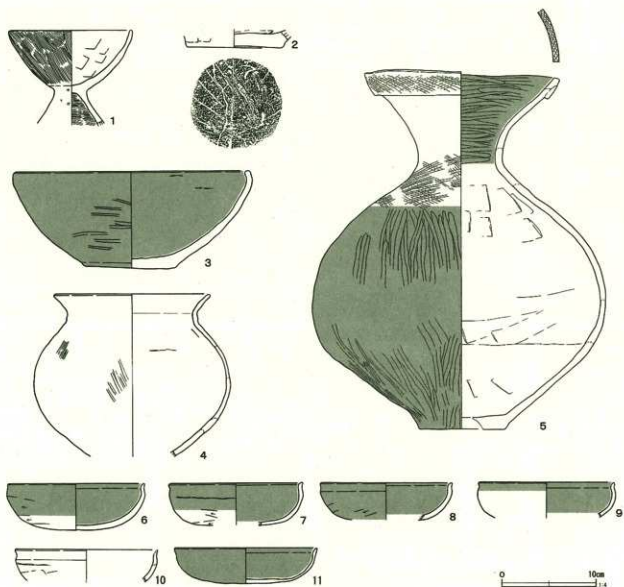
- 5 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体層
- 6 黒褐色土 黄褐色土粒微量 しまりやや強
- 7 黒褐色土 黄褐色土粒微量 土粒少 しまり強
- 8 灰黒褐色土 黄褐色土・黒色土やや微文状に少
- 9 灰黄褐色土 黄褐色土多 黒色土少 しまりやや強



第78図 第1号方形周溝墓



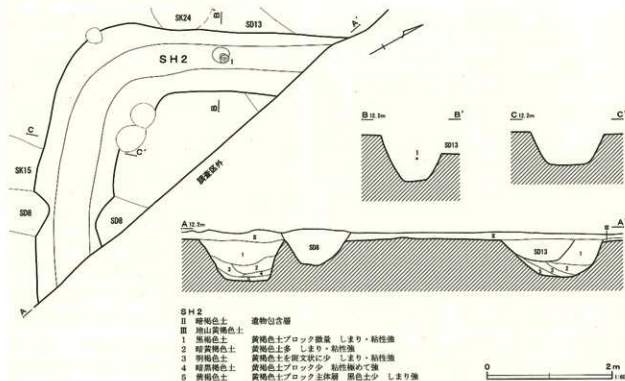
第79图 第1号方形周满墓遗物出土状况



第80图 第1号方形周满墓出土遗物

第16表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SH1	C	土師器	高坏	80	13.0		[10.1]	A C D F G	普通	橙		No4・7
2	SH1	C	土師器	壺	100		10	[1.8]	A D E F	普通	にぶい 黄橙		No4 底部木炭痕
3	SH1	C	土師器	鉢	100	25.0	9.8	10.2	A C G	良好	にぶい 黄橙		No5 全面赤彩 器面風化顕著 調整痕はみえない
4	SH1	C	土師器	甕	60	(16.6)		[12.1]	A C D F G K	普通	にぶい 黄橙		No6 器面剥離顕著 調整痕は殆どみえない
5	SH1	C	土師器	壺	95	20.7	9.2	38.3	E F K	普通	にぶい 黄橙		No3 内面口縁部・外面胴部一底部にかけて赤彩 底部穿孔の可能性あり
6	SH1	C	土師器	坏	80	14.4		4.9	A B C K	普通	明赤褐		No1 内面・外面一部赤彩 器面風化
7	SH1	C	土師器	坏	20	(14.0)		[4.5]	C F G	普通	にぶい 橙		No2 内面・外面一部赤彩
8	SH1	C	土師器	坏	15	(14.0)		[4.0]	C E F	普通	橙		H-10G 全面赤彩 器面風化 外面の赤彩範囲不明
9	SH1	C	土師器	坏	30	(14.4)		[3.8]	A B F F G H	普通	暗赤褐		内面・外面口縁部赤彩 外面剥離のため調整痕がみえない
10	SH1	C	土師器	坏	20	(15.0)		[3.4]	A C F	普通	明赤褐		H-10G 外面口縁部以外は黒炭となつているため、赤彩範囲不明 器面風化
11	SH1	C	土師器	坏	40	(15.2)		4.8	A B F G	普通	明赤褐		No2 器面風化顕著 調整痕は殆どみえない 全面赤彩か



第81図 第2号方形周溝墓

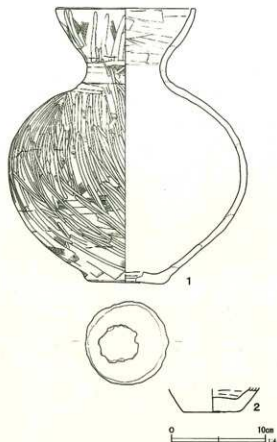
第17表 第2号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SH2	C	土師器	壺	95	14.8	8.9	29.4	B D E F K	普通	にぶい 橙		No1 底部穿孔
2	SH2	C	土師器	壺か	80		(6.4)	[2.5]	A C D F G	普通	にぶい 橙		南コーナー

第3号方形周溝墓 (第83・84図)

M-7・8、N-7グリッドに位置する。西溝と北・南側コーナーのみの検出で、ほかは調査区外に位置している。第4号方形周溝墓との距離は

4.50m、第5号方形周溝墓とは11.70m、第6号方形周溝墓とは22.30mである。第210号土壌に切られている。本周溝墓の覆土は自然堆積で、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。検出し



第82図 第2号方形周溝墓出土遺物

た範囲内において、周溝も方台部とともに直線的な辺をもつ方形または長方形である。周溝を含めた全体の規模は、北東-南西は11.78m、同方位における方台部の規模は、9.02m、長軸方向はN-50°-EもしくはN-40°-Wである。周溝の規模は、北溝が上場幅0.98m、下場幅0.35m、深さ0.56m、西溝が上場幅0.82~1.20m、下場幅0.25~0.72m、深さ0.23~0.42m、南溝が上場幅1.40m、下場幅0.63m、深さ0.37m。全体的に周溝の立ち上がりは、方台部側の立ち上がりが急で、外周側が緩やかである。

周溝内から出土した遺物で、図化できた遺物は7点(1~7)である。

第4号方形周溝墓(第85・86図)

M・N-6・7グリッドに位置する。4辺すべてが検出できた唯一の方形周溝墓である。重複するすべての遺構に切られていると考えられる。第

3号方形周溝墓との距離は4.50m、第5号方形周溝墓とは1.20m、第6号方形周溝墓とは10.80mである。覆土は自然堆積で、土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。

周溝も方台部とともに直線的な辺をもつ長方形である。周溝を含めた全体の規模は、北西-南東8.22mで、南西-北東は9.37mまでの確認である。方台部の規模は、北西-南東6.16m、南西-北東7.33m、長軸方位N-46°-Eである。西溝は上場幅1.15~1.31m、下場幅0.40~0.96m、深さ0.33m、断面形は概ね逆台形。南溝は上場幅1.02~1.18m、下場幅0.50~0.82m、深さ0.28~0.30m、断面形は概ね逆台形。東溝は上場幅0.87~1.30m、下場幅0.45~0.59m、深さ0.39~0.45m。北溝は上場幅0.80~1.20m、下場幅0.50~0.90m、深さ0.35m。全体的に周溝の立ち上がりは、外周側よりも方台部側の方が急である。

図化できた遺物は1点(1)である。

第5号方形周溝墓(第87・88図)

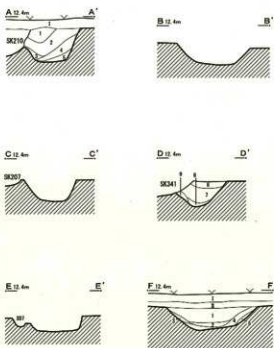
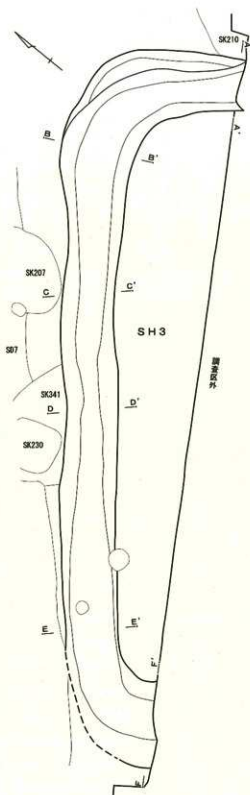
N-5・6、O-5グリッドに位置する。北側・西側の溝のみの検出であり、そのほかの部分は調査区外である。重複するすべての遺構に切られている。第3号方形周溝墓との距離は11.70m、第4号方形周溝墓とは1.20m、第6号方形周溝墓とは1.20mである。覆土は自然堆積で、土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。周溝も方台部ともに、直線的な辺をもつ方形もしくは長方形と推定される。

周溝の規模は、上場幅0.95~1.18m、下場幅0.42~0.62m、深さ0.50~0.58m、主軸方位N-48°-E、またはN-42°-Wである。全体的に周溝の立ち上がりは、方台部側の立ち上がりが急で、外周側が緩やかである。

図化できた遺物は3点(1~3)である。

第6号方形周溝墓(第89~91図)

N-4・5、O-4・5グリッドに位置する。

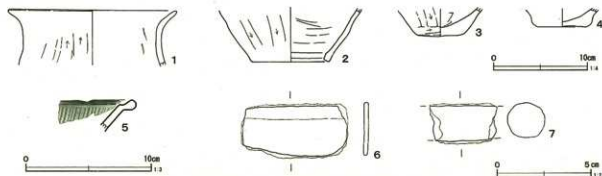


SH 3

- I 耕作土
- II 暗褐色土 遺物を含む層 焼土粒・炭化物微量
- 1 暗褐色土 焼土ブロック(0.5cm)微量 地山ブロック(0.5~1.0cm)少
- 2 黄褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5cm)微量 炭化物少
- 3 暗黄褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)多 炭化物少
- 4 暗黄褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)やや多
- 5 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)少
- 6 暗褐色土 地山粒少 しまり強 粘性やや弱
- 7 黄褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5cm)少 しまり強 粘性やや弱
- 8 黄褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)極多 しまり強 粘性やや弱
- 9 暗黄褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)多 しまり強 粘性やや弱



第83図 第3号方形周溝墓



第84図 第3号方形周溝墓出土遺物

第18表 第3号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SH3	C	土師器	甕	15 (17.8)			[5.7]	A F J	普通	橙		器面風化顕著
2	SH3	C	土師器	甕	40	(8.0)	(5.6)		B C F G	普通	明赤褐		
3	SH3	C	土師器	甕	20		5.0	[2.9]	C F J	普通	橙		
4	SH3	C	土師器	壺	25	(5.0)	[1.9]		C I J	普通	明赤褐		器面風化顕著
5	SH3	C	陶器	鉢	5			[2.5]	A	普通	にぶい赤褐	輪轆	鉄輪 白化粧土(刷毛) 肥前系(唐津) 17C 後半-18C 前半
6	SH3	C	鉄製品	鎌か		長さ5.5cm 重さ16.4g	幅2.0~2.6cm	厚さ0.2cm					錆化著しい
7	SH3	C	鉄製品	棒状製品か		長さ3.7cm 重さ19.9g	幅1.8cm	厚さ2.1cm					

北側・西側コーナーの検出であり、そのほかは調査区外である。重複するすべての遺構に切られていると推定される。第3号方形周溝墓との距離は22.30m、第4号方形周溝墓とは10.80m、第5号方形周溝墓とは1.20mである。覆土は自然堆積で、土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。

全体的な平面形は、周溝も方台部も、ともに直線的な辺をもつ方または長方形と考えられる。



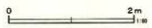
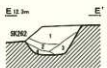
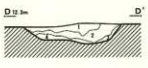
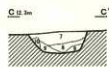
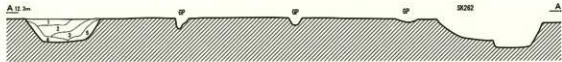
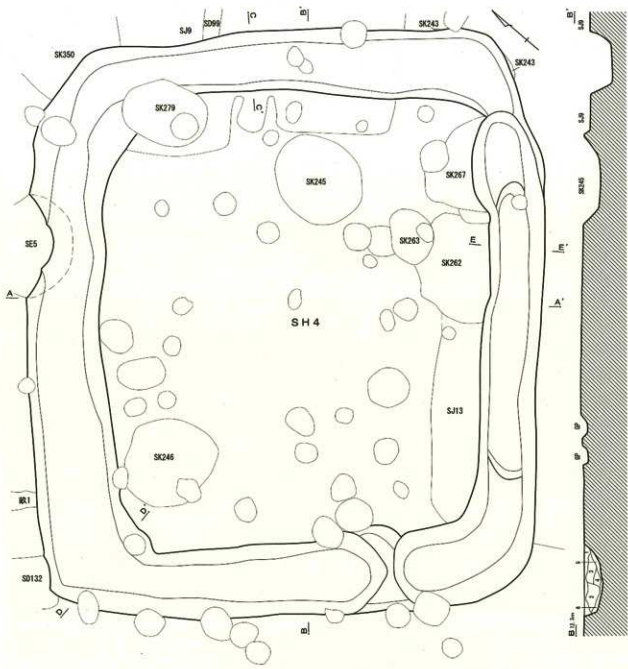
第85図 第4号方形周溝墓出土遺物

第19表 第4号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SH4	C	土師器	高坏	50 (13.6)	15.0	10.7		A B C D F G	普通	にぶい黄橙		赤彩 内面へら磨き

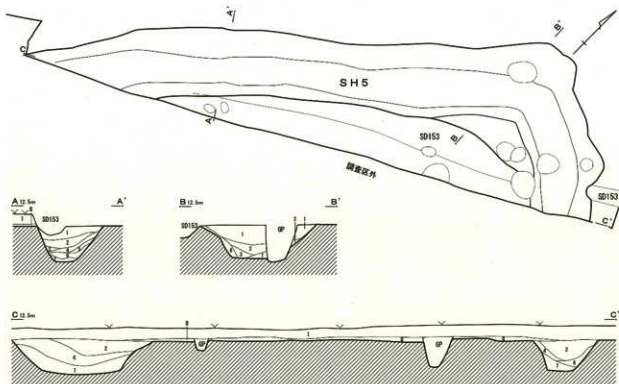
主軸方位N-46°-E、またはN-44°-Wである。周溝の規模は、北溝が上場幅1.12~1.58m、下場幅0.76~1.35m、深さ0.28~0.56m、断面形は概ね逆台形、西溝が上場幅0.96~1.20m、下場幅0.72~0.96m、深さ0.20~0.23m、断面形は皿状に近い逆台形、東溝が上場幅1.45~1.80m、下場幅0.96~1.21m、深さ0.14~0.42m、断面形は皿状に近い逆台形。全体的に周溝の立ち上がりは、概ね方台部側の立ち上がりが急で、外周側が緩やかである。

本遺構では、周溝内から土壌が2基確認された(第1・2号土壌)。第1号土壌は第6号方形周溝墓の遺構確認の段階で検出されており、溝内埋葬の可能性を想定して、土壌のサンプリングを行った。この土壌サンプルについては、整理段階でリン・カルシウム分析を委託した。その結果については、別項を参照願いたい。第1号土壌は、上住

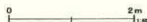


- SH 4
- | | | | | | |
|---------|-------------------------|---------|--------------------------|------|-----|
| 1 暗灰褐色土 | 耕作土 | 6 暗黄褐色土 | 地山粒・地山ブロック(1.0~2.0cm)やや多 | しまり強 | 粘性弱 |
| 2 黑褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.5cm)少 | 炭化物微量 | しまり強 | 粘性弱 | |
| 3 暗褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.5~2.0cm)多 | 炭化物微量 | しまり強 | 粘性弱 | |
| 4 暗黄褐色土 | 地山粒・地山ブロック(1.0~3.0cm)極多 | 炭化物微量 | しまり強 | 粘性弱 | |
| 5 暗褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.5cm)少 | しまり強 | 粘性弱 | | |
| | | 7 黑褐色土 | 黄土粒・地山ブロック(0.5cm)微量 | | |
| | | 8 暗褐色土 | 黄土粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)少 | | |
| | | 9 暗褐色土 | 地山ブロック(2.0~3.0cm)多 | | |
| | | 10 黄褐色土 | 地山ブロック(2.0~3.0cm)極多 | | |

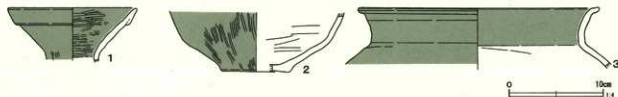
第86図 第4号方形周溝墓



- SH5
 I 耕作土
 II 暗褐色土 遺物包含層 粘土粒・炭化物微量
 1 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5cm)微量 炭化物少 しまり強 粘性弱
 2 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5cm)少 炭化物少 しまり強 粘性弱
 3 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(1.0~2.0cm)少 炭化物少 しまり強 粘性弱
 4 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)少 炭化物微量 しまり強 粘性弱
 5 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(1.0~2.0cm)少 炭化物微量 しまり強 粘性弱
 6 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5cm)極多 炭化物少 しまり強 粘性弱
 7 暗褐色土 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)極多 炭化物少 しまり強 粘性弱



第87図 第5号方形周溝墓



第88図 第5号方形周溝墓出土遺物

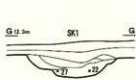
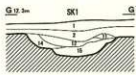
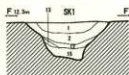
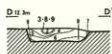
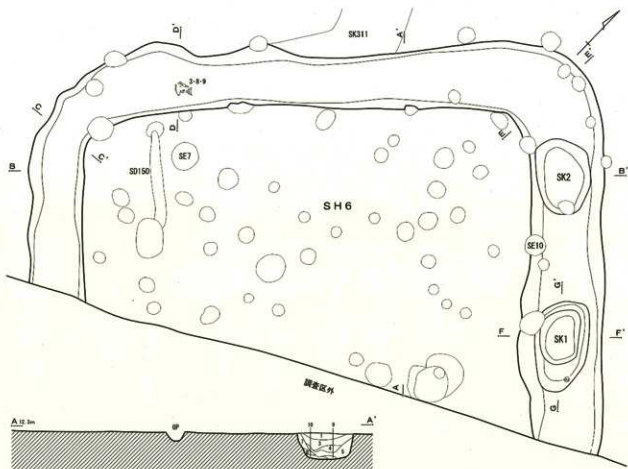
第20表 第5号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SH5	C	土師器	壺	25	(13.6)		[5.7]	A D F G	普通	赤		内外面赤彩 内面へラ磨き
2	SH5	C	土師器	壺	40		(7.3)	[6.2]	A C F G	普通	にぶい橙		外面赤彩 器面風化
3	SH5	C	土師器	壺	25	(25.5)		[6.5]	A C G	普通	赤		内面口縁部・外面赤彩

2.00×1.15m、下径0.96×0.60m、深さ0.80mの楕円形で、断面形は逆台形に近い。第2号土壌は、上径1.60×1.12m、下径(1.28)×0.83m、深さ0.32m、断面形は逆台形に近い。両土壌ともに長

軸方向を東溝に合わせた状態であった。

第6号方形周溝墓出土遺物のうち、図化できた遺物は9点(1~9)である。



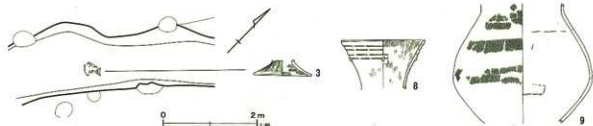
土壌サンプリング箇所

SH6

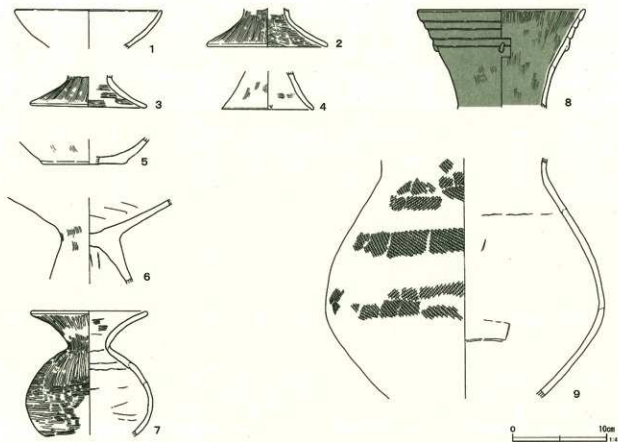
- | | | | |
|---------|-------------------------|------------------|-------|
| 1 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物微量 | しまり強 | 粘性やや強 |
| 2 暗褐色土 | 黒褐色土ブロック(1.0cm)多 | | |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物・地山ブロック(0.5cm)微量 | | |
| 4 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物・地山ブロック(0.3cm)少 | しまり強 | 粘性やや強 |
| 5 暗褐色土 | 焼土粒・地山粒少 | 地山ブロック(0.3cm)やや多 | |
| 6 暗褐色土 | しまり強 | 粘性やや強 | |
| 7 暗黄褐色土 | 黄褐色土ブロック(0.2~1.0cm)少 | | |
| 8 暗褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.5cm)やや多 | しまり強 | 粘性やや強 |
| 9 暗黄褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.5~1.0cm)多 | | |
| 10 黄褐色土 | 地山粒・地山ブロック(0.3cm)多 | | |
| 11 暗褐色土 | 黄褐色粘土ブロック(0.2~0.3cm)少 | | |
| 12 暗褐色土 | 黄褐色粘土ブロック(0.5~0.8cm)多 | | |
| 13 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒(0.5~0.8cm)少 | | |
| 14 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロック(0.5~0.8cm)少 | | |
| 15 暗褐色土 | 黄褐色粘土ブロック(0.5~0.8cm)少 | | |



第89図 第6号方形周溝墓



第90図 第6号方形周溝墓遺物出土状況



第91図 第6号方形周溝墓出土遺物

第21表 第6号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SH6	C	土師器	高坏	20	(15.4)		[4.1]	A G	良好	橙		O-4G 器面風化顕著
2	SH6	C	土師器	高坏	80		12.8	[4.1]	A C F G	良好	橙		N-4G
3	SH6	C	土師器	高坏	90		12.4	[3.4]	C E F	良好	橙		No.1
4	SH6	C	土師器	台付甕 か	100		9.8	[4.0]	A C F G	普通	橙		内外面刷毛目僅かに残る 器面風化
5	SH6	C	土師器	壺	30		(8.8)	[2.7]	B F G	普通	にぶい 橙		器面風化顕著
6	SH6	C	土師器	台付甕	30			[9.1]	A B C G	普通	にぶい 橙		N-4G 内面炭化物付着
7	SH6	C	土師器	壺	40	(12.4)		[13.2]	A C F G	普通	橙		ハケ・ヘラ跡き 一部ヘラ削り状を呈す箇所あり
8	SH6	C	土師器	壺	45	(17.8)		[10.4]	C D F G	普通	にぶい 橙		No.1 内面赤彩 外面極僅かに残る 器面風化顕著
9	SH6	C	土師器	壺	25			[25.6]	B C D F G K	普通	浅黄橙		No.1 器面風化顕著 調整痕残らず 赤彩の有無不明

5. 掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡はA区30棟、C区19棟の計49棟である。発掘調査の工程上、A区とC区を並行して調査を行う必要があったため、遺構名の重複を避けるべく、先に着手したC区では第1号から、A区では第51号から命名し第20～50号掘立柱建物跡は欠番となっている。

第1号掘立柱建物跡 (第93図)

H-11グリッドに位置する。多数の遺構と重複している。土層断面上で1つのピットを切り、1つのピットに切られている。第2号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行4間(6.8m)、梁行2間(4.2m)、面積28.56㎡、主軸方位はN-36°-Wである。

柱間距離は、桁行P9-P10間1.4m、P10-P11間1.9m、P11-P12間2.1m、P12-P1間1.4m(平均1.70m)、梁行P1-P2間1.5m、P2-P3間2.7m、P8-P9間2.0m(平均2.07m)である。なお、P4・P6・P7は確認されなかった。柱穴の規模は径28×36cm～46×65cm、深さ9～50cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行の柱筋は通っているが、柱間

距離は一定しない。本掘立柱建物跡は、第2号掘立柱建物跡の主軸方位(N-55°-E)とほぼ直交関係にあるが、重複していることから同時性はない。また、第4号掘立柱建物跡(N-52°-E)ともほぼ直交する。

遺物は出土しなかった。

第2号掘立柱建物跡 (第94図)

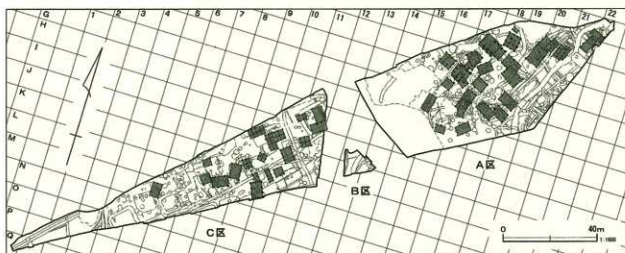
H・I-11グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡を始め多数の遺構と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(6.6m)、梁行2間(4.0m)、面積26.40㎡、主軸方位はN-55°-Eである。

柱間距離は、桁行P1-P2間2.5m、P2-P3間2.7m、P3-P4間1.4m、P7-P8間1.5m(平均2.03m)、梁行P10-P11間2.2mである。なお、P5・P6・P9は確認されなかった。柱穴の規模は径32×32cm～52×54cm、深さ43～63cmと幅がある。第1号掘立柱建物跡の主軸方位(N-36°-W)とほぼ直交関係にあるが、重複していることから同時性はない。

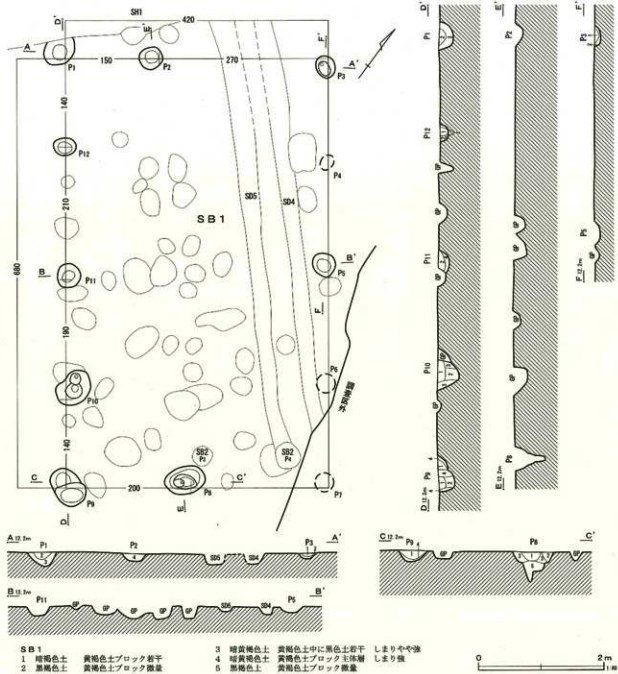
遺物は出土しなかった。

第3号掘立柱建物跡 (第95図)

I-11グリッドに位置する。土層断面上で第



第92図 掘立柱建物跡分布図



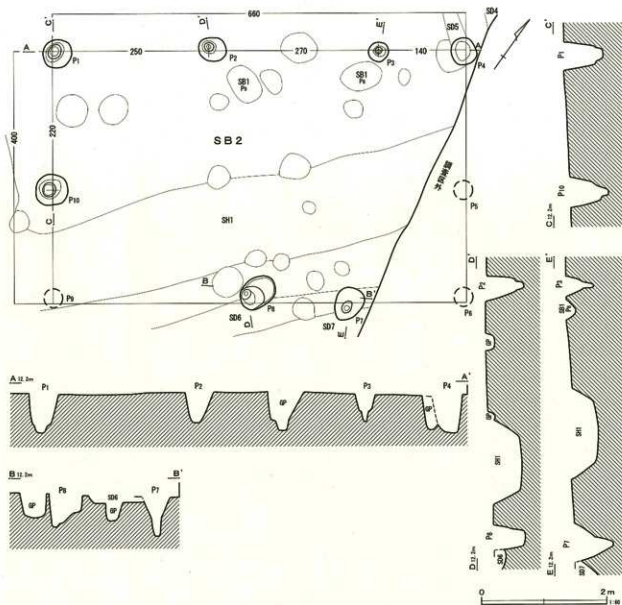
第93図 第1号掘立柱建物跡

3号土壌を切っている以外は、他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行2間(4.3m)、梁行2間(4.1m)の総柱建物で、面積17.63㎡、主軸方位はN-30°-Wである。

柱間距離は、桁行P3-P4間2.2m、P4-P5間2.1m、P8-P1間2.2m、P2-P9間2.2m(平均2.18m)、梁行P1-P2間2.2m、P2-P3間1.9m、P4-P9間1.9m、P9-P8

間2.2m(平均2.05m)である。なお、P6・P7は確認されなかった。柱穴の規模は径32×36cm～65×72cm、深さ34～55cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。柱筋は通っており、柱間距離はほぼ一定している。

遺物は出土しなかった。



第94図 第2号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡 (第96図)

H-10・11グリッドに位置する。第1号方形周溝墓を切り、第1号土壇に切られているが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(4.1m)、梁行2間(2.5m)、面積10.25㎡、主軸方位はN-52°-Eである。

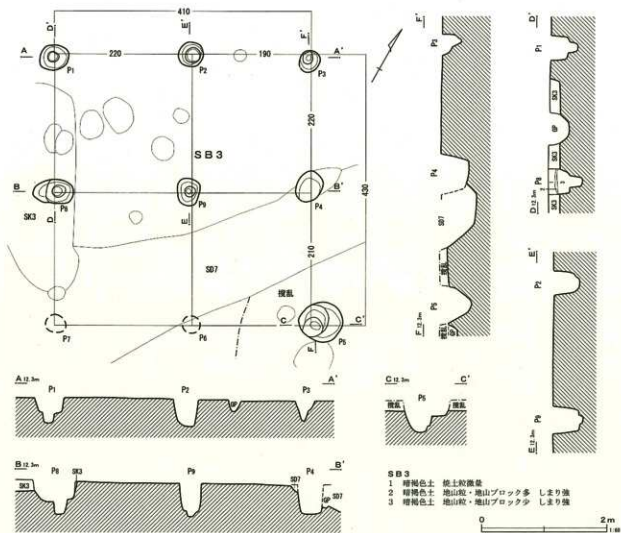
柱間距離は、桁行P1-P2間1.3m、P2-P3間1.5m、P3-P4間1.3m、P6-P7間1.4m、P7-P8間1.7m、P8-P9間1.0m(平均1.37m)、梁行P4-P5間1.4m、P5-P6

間1.1m、P9-P10間1.2m、P10-P1間1.3m(平均1.25m)である。柱穴の規模は径20×20cm～50×50cm、深さ24～48cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。柱筋はほぼ通っているが、柱間距離は若干不揃いである。第1号掘立柱建物跡(N-36°-W)とほぼ直交する。

遺物は出土しなかった。

第5号掘立柱建物跡 (第97図)

J-10・11グリッドに位置する。第11号住居跡を切っているが、その他の重複遺構との新旧関



第95図 第3号掘立柱建物跡

係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行4間(6.2m)、梁行3間(4.4m)、面積27.28㎡、主軸方位はN-38°-Wである。

柱間距離は、桁行P4-P5間1.1m、P5-P6間2.0m、P6-P7間1.8m、P7-P8間1.3m、P11-P12間1.5m、P12-P13間1.6m、P13-P14間1.3m、P14-P1間1.8m(平均1.55m)、梁行P1-P2間1.5m、P2-P3間1.4m、P3-P4間1.5m、P8-P9間1.4m(平均1.45m)である。なお、P10は確認されなかった。柱穴の規模は径30×30cm~55×62cm、深さ21~70cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。柱筋はほぼ通っているが、柱

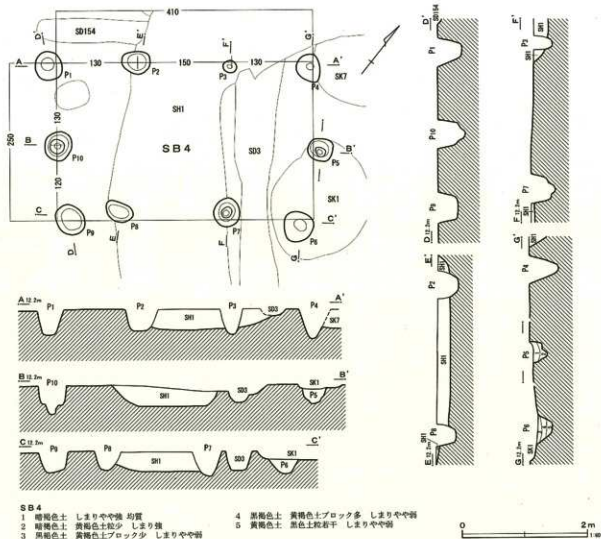
間距離は若干不揃いである。梁行の間柱は、柱筋より内側に入り込んでいる。

遺物は出土しなかった。

第6号掘立柱建物跡(第98・151図)

K-10グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行2間(3.8m)、梁行2間(3.4m)、面積12.92㎡、主軸方位はN-51°-Eである。

柱間距離は、桁行P3-P4間1.7m、P4-P5間2.1m、P7-P8間1.8m、P8-P1間2.0m(平均1.90m)、梁行P1-P2間1.7m、P2-P3間1.7m、P5-P6間1.7m、P6-P7間1.7m(平均1.70m)である。柱穴の規模は径27



第96図 第4号掘立柱建物跡

×33cm~55×62cm、深さ40~68cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。柱筋はほぼ通っており、柱間距離は近似している。

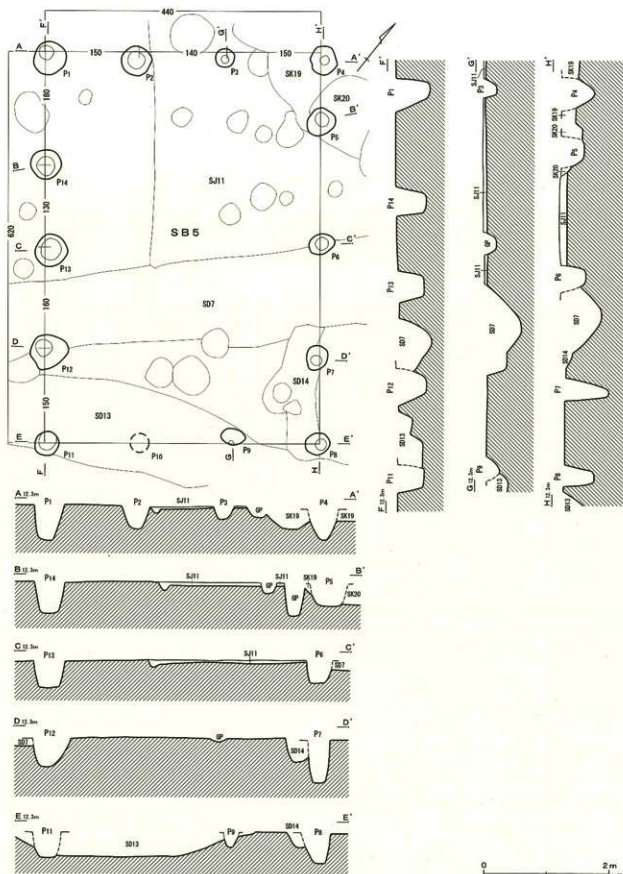
土師器甕1点(1)が出土した。

第7号掘立柱建物跡(第99図)

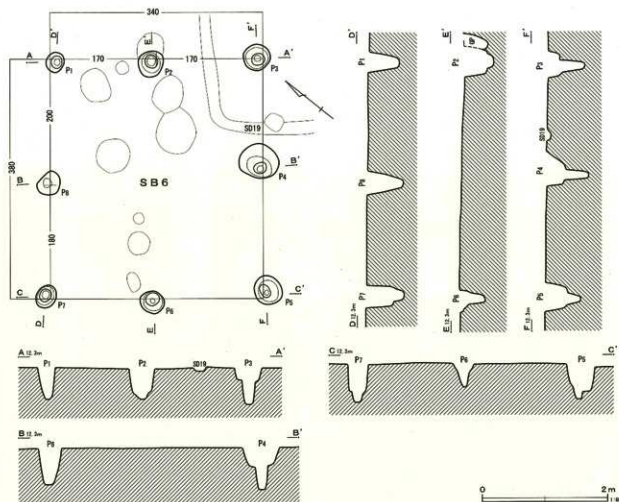
I・J-9・10グリッドに位置する。第3・16号住居跡を切るが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(7.2m)、梁行2間(3.3m)の総柱建物で、面積23.76㎡、主軸方位はN-38°-Wである。

柱間距離は、桁行P3-P4間2.1m、P4-P5間2.2m、P5-P6間2.9m、P9-P10間2.5m、P10-P11間1.8m、P2-P11間1.8m、P

11-P12間2.5m、P12-P7間2.9m(平均2.34m)、梁行P1-P2間1.6m、P2-P3間1.7m、P6-P7間1.7m、P4-P11間1.7m、P11-P10間1.6m、P5-P12間1.7m、P12-P9間1.6m(平均1.66m)である。P8は確認されなかった。柱穴の規模は径30×32cm~42×50cm、深さ22~72cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で径・深度ともに小規模なものが多い。柱筋はほぼ通っているが、柱間距離は若干不揃いである。また梁行の間柱は柱筋より僅かながら内側に入り込んでいる。第8(N-38°-W)・12(N-40°-W)・13(N-37°-W)号掘立柱建物跡とほぼ平行する。さらに、近在の掘



第97图 第5号掘立柱建物跡



第98図 第6号掘立柱建物跡

立柱建物跡を観察すると、第11号掘立柱建物跡(N-52°-E)とは直交関係にある。

遺物は出土しなかった。

第8号掘立柱建物跡(第100図)

I-9・10、J-10グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行2間(4.1m)、梁行2間(3.9m)の総柱建物で、面積15.99㎡、主軸方位はN-38°-Wである。

柱間距離は、桁行P3-P4間2.1m、P4-P5間2.0m、P7-P8間2.0m、P8-P1間2.1m、P2-P9間2.1m、P9-P6間2.0m(平均2.05m)、梁行P1-P2間1.9m、P2-P3間2.0m、P5-P6間2.0m、P6-P7間1.9m、P4-P9間2.0m、P9-P8間1.9m(平均1.95

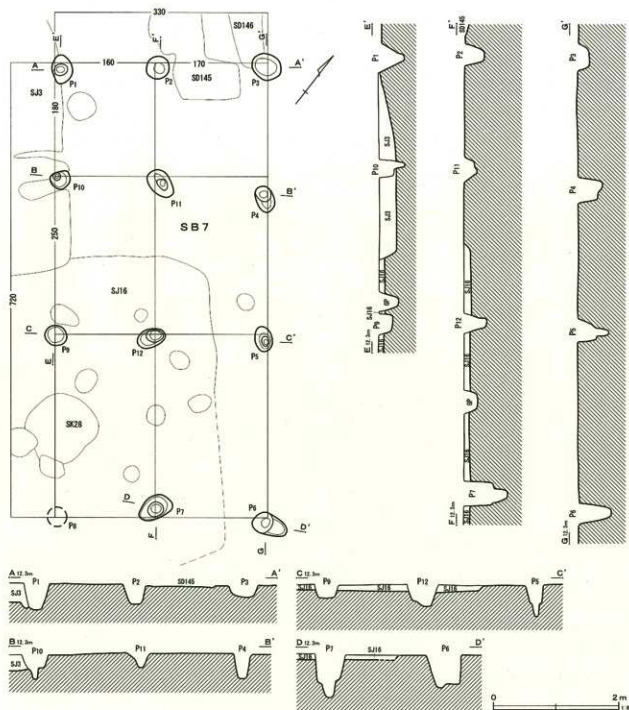
m)である。柱穴の規模は径32×37cm~47×62cm、深さ20~62cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。柱筋はほぼ通っており、柱間距離も近似している。概ね第11号掘立柱建物跡(N-52°-E)と直交し、第7号掘立柱建物跡(N-38°-W)とほぼ平行する。

遺物は出土しなかった。

第9号掘立柱建物跡(第101図)

L-8グリッドに位置する。第7・15号住居跡を切っているが、第17号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、西桁行4間(6.9m)、東桁行3間(6.9m)、梁行2間(4.3m)、面積29.67㎡、主軸方位はN-67°-Eである。

柱間距離は、桁行P3-P4間2.2m、P4-P



第99図 第7号掘立柱建物跡

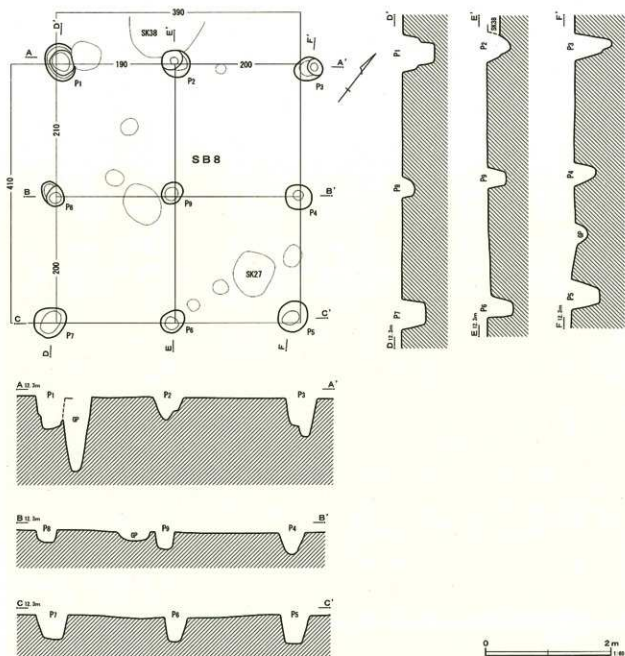
5間2.5m、P5-P6間2.2m、P8-P9間1.7m、P9-P10間1.4m、P10-P11間2.6m、P11-P1間1.2m（平均2.30m）、梁行P1-P2間2.1m、P2-P3間2.2m、P6-P7間2.4m、P7-P8間1.9m（平均2.15m）である。柱穴の規模は径32×32cm～62×75cm、深さ35～78cmと

幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。柱筋は概ね通っているが、柱間距離は一定しておらず不揃いである。

遺物は出土しなかった。

第10号掘立柱建物跡（第102・151図）

J・K-9グリッドに位置する。重複遺構との



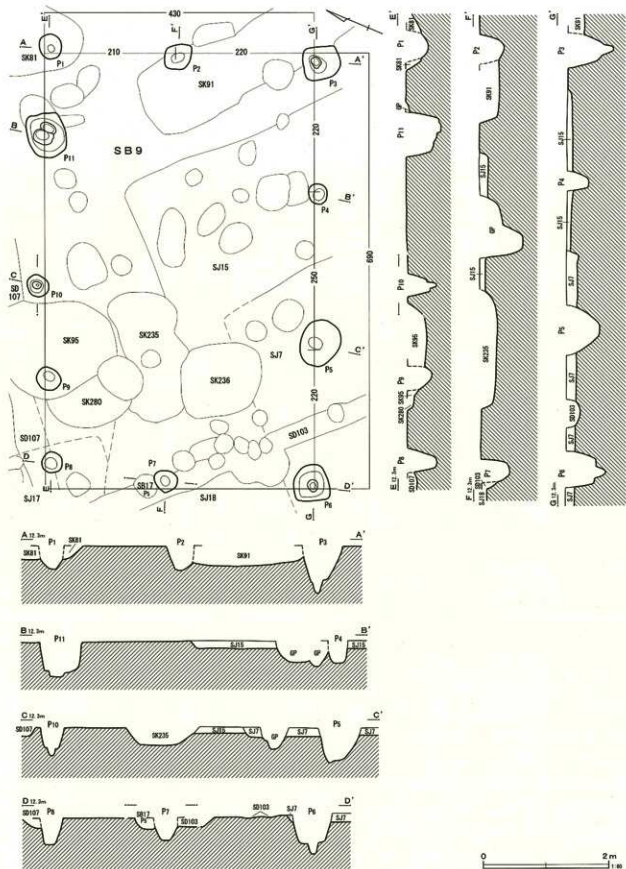
第100図 第8号掘立柱建物跡

新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行2間(3.2m)、梁行2間(3.1m)の総柱建物で、面積9.92㎡、主軸方位はN-81°-Wである。

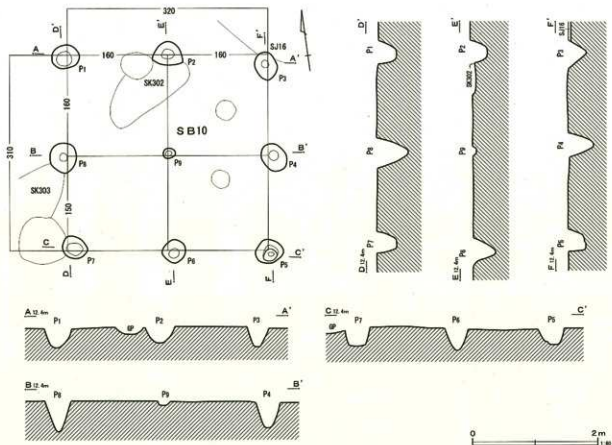
柱間距離は、桁行P1-P2間1.6m、P2-P3間1.6m、P5-P6間1.6m、P6-P7間1.6m、P8-P9間1.6m、P9-P4間1.6m(平均1.60m)、梁行P3-P4間1.6m、P4-P5間1.5m、P7-P8間1.5m、P8-P1間1.6m、

P2-P9間1.6m、P9-P6間1.5m(平均1.55m)である。柱穴の規模は径18×20cm~42×47cm、深さ7~52cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに小規模である。特にP9は小さく、床束の可能性もある。柱筋の通りは良好で、柱間距離も近似している。

須恵器(3)が1点出土した。



第101图 第9号掘立柱建物跡



第102図 第10号掘立柱建物跡

第11号掘立柱建物跡 (第103図)

I・J-8・9グリッドに位置する。第3号住居跡を切っているが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行4間(6.9m)、梁行2間(3.6m)の総柱建物で、面積24.84㎡、主軸方位はN-52°-Eである。

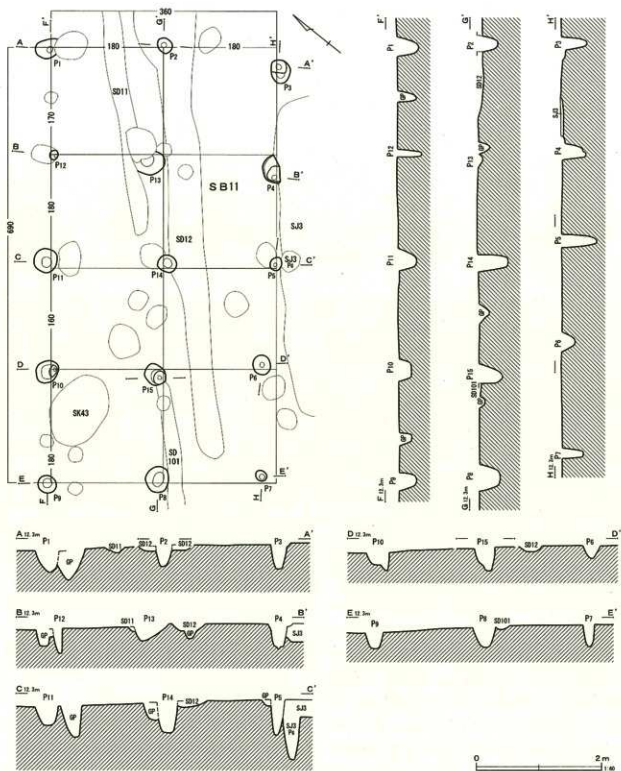
柱間距離は、桁行P3-P4間2.0m、P4-P5間1.5m、P5-P6間1.6m、P6-P7間1.8m、P9-P10間1.8m、P10-P11間1.6m、P11-P12間1.8m、P12-P1間1.7m、P2-P13間1.8m、P13-P14間1.7m、P14-P15間1.8m、P15-P8間1.6m(平均1.73m)、梁行P1-P2間1.8m、P2-P3間1.8m、P7-P8間1.8m、P8-P9間1.8m、P4-P13間2.0m、P13-P12間1.6m、P5-P14間1.7m、P14-P11間1.9m、P6-P15間1.8m、P15-P10間1.8m(平均1.80m)である。柱穴の規模は径

11×20cm～36×43cm、深さ20～57cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに小規模なものが多い。東側桁行の隅柱は、若干内側に入り込んでいる。柱筋は概ね通っているが、柱間距離は一定しておらず揃っていない。第7・8(ともにN-38°-W)・14(N-37°-W)号掘立柱建物跡と直交する位置関係である。遺物は出土しなかった。

第12号掘立柱建物跡 (第104図)

K-10グリッドに位置する。第32号土壌を切っているが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行4間(5.6m)、梁行2間(1.9m)、面積10.64㎡、主軸方位はN-40°-Wである。

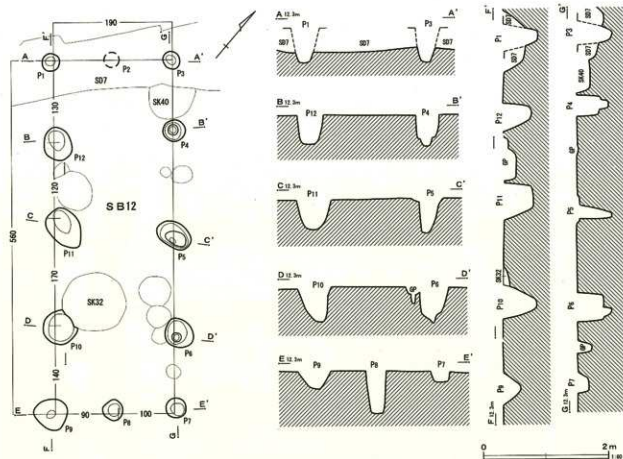
柱間距離は、桁行P3-P4間1.1m、P4-P5間1.7m、P5-P6間1.6m、P6-P7間1.2m、P9-P10間1.4m、P10-P11間1.7m、P



第103図 第11号掘立柱建物跡

11-P12間1.2m、P12-P1間1.3m (平均1.40m)、梁行P7-P8間1.0m、P8-P9間0.9m (平均0.95m)である。なお、P2は確認されなかった。柱穴の規模は径28×29cm～50×70cm、深

さ18～67cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに小規模なものも含まれる。柱筋は概ね通っているが、柱間距離は一定しておらず不揃いである。他の掘立柱建物



第104図 第12号掘立柱建物跡

跡と比べて、柱間距離が小さいといえる。第6号掘立柱建物跡(N-51°-E)と直交し、第13・14号掘立柱建物跡(ともにN-37°-W)とはほぼ平行する。また、第13号掘立柱建物跡とは、形態的にも規模的にも類似している。

遺物は出土しなかった。

第13号掘立柱建物跡(第105図)

K・L-9・10グリッドに位置する。第6号住居跡、第71号土壇およびピット1基を切っているが、第15号掘立柱建物跡や、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(5.8m)、梁行1間(2.0m)、面積11.60㎡、主軸方位はN-37°-Wである。

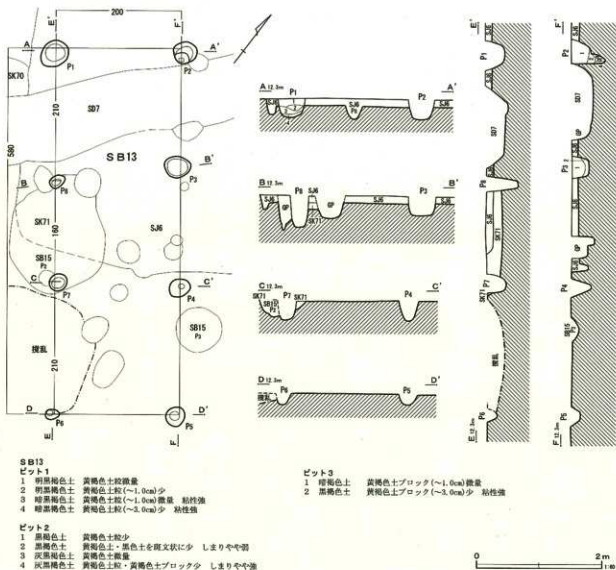
柱間距離は、桁行P2-P3間1.9m、P3-P4間1.9m、P4-P5間2.0m、P6-P7間2.1m、P7-P8間1.6m、P8-P1間2.1m(平均1.93m)、梁行P1-P2間2.0m、P5-P6

間2.0m(平均2.00m)である。柱穴の規模は径17×23cm~40×50cm、深さ17~55cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともばらつきがある。柱筋は概ね通っているが、柱間距離は一定しておらず不揃いである。第6号掘立柱建物跡(N-51°-E)と直交し、第12(N-40°-W)・14(N-37°-W)号掘立柱建物跡とはほぼ平行する。また、第12号掘立柱建物跡とは、形態的にも規模的にも類似している。

遺物は出土しなかった。

第14号掘立柱建物跡(第106・151図)

K-9グリッドに位置する。第63号土壇を切り、第52~54号土壇に切られている。その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行2間(4.1m)、梁行2間(3.4m)の総柱建物で、面積13.94㎡、主軸方位はN-37°-Wである。



第105図 第13号掘立柱建物跡

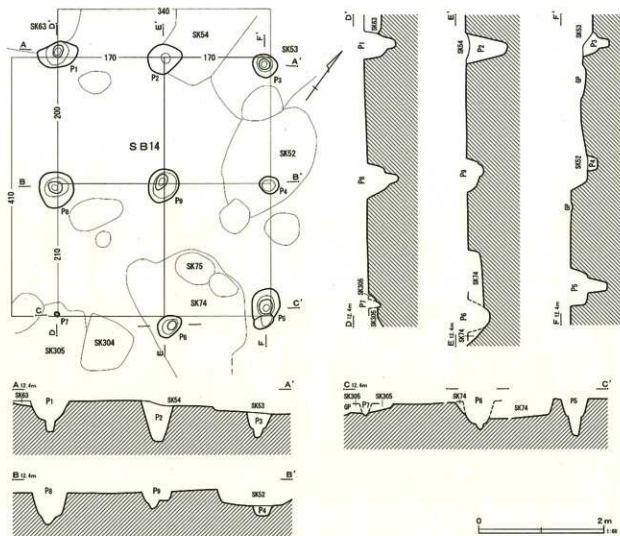
柱間距離は、桁行P3-P4間2.0m、P4-P5間2.1m、P7-P8間2.1m、P8-P1間2.0m、P2-P9間2.0m、P9-P6間2.1m(平均2.05m)、梁行P1-P2間1.7m、P2-P3間1.7m、P5-P6間1.7m、P6-P7間1.7m、P4-P9間1.7m、P9-P8間1.7m(平均1.70m)である。柱穴の規模は径7×8cm〜56×58cm、深さ2〜65cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。柱筋の通りは良好で、柱間距離はほぼ一定している。第12(N-40°-W)・13(N-37°-W)号掘立柱建物跡と平行する。

土師器2点(4・5・6世紀第3四半期)が出土した。

第15号掘立柱建物跡(第107図)

K・L-9・10グリッドに位置する。ピット2基を切り、第71・85号土壌に切られる。第13号掘立柱建物跡や、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(6.7m)、梁行2間(4.5m)、面積30.15㎡、主軸方位はN-22°-Wである。

柱間距離は、桁行P3-P4間2.5m、P4-P5間2.2m、P5-P6間2.0m、P8-P9間1.8m、P9-P10間2.4m、P10-P1間2.5m(平



第106図 第14号掘立柱建物跡

均2.23m)、梁行P1-P2間2.0m、P2-P3間2.5m、P6-P7間2.0m、P7-P8間2.5m(平均2.25m)である。柱穴の規模は径23×26cm～78×87cm、深さ7～57cmと幅がある。P3～P6・P8では、柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。柱筋の通りは比較的良好で、柱間距離についても部分的に変則的ではあるが、一定している。

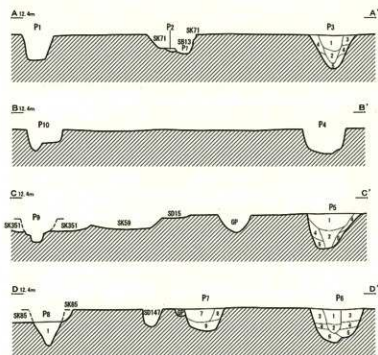
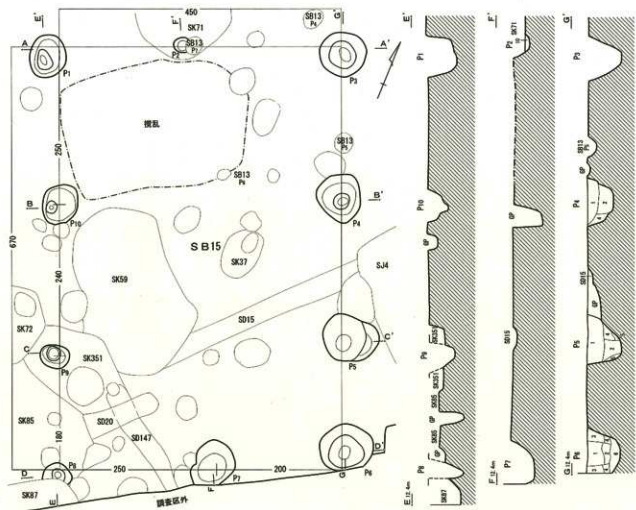
遺物は出土しなかった。

第16号掘立柱建物跡(第108図)

K・L-8・9グリッドに位置する。第5号住居跡を切っているが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3

間(6.2m)、梁行2間(4.3m)、面積26.66㎡、主軸方位はN-3°-Wである。

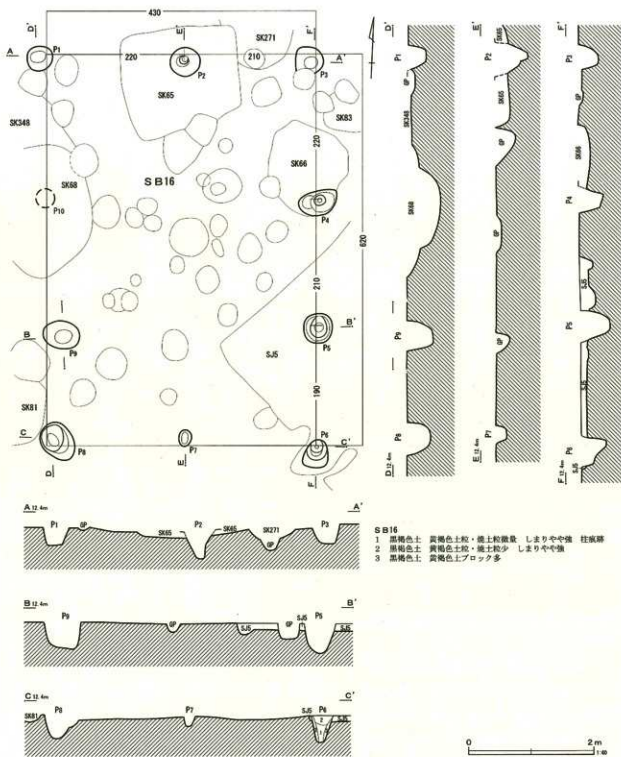
柱間距離は、桁行P3-P4間2.2m、P4-P5間2.1m、P5-P6間1.9m、P8-P9間1.8m(平均2.00m)、梁行P1-P2間2.2m、P2-P3間2.1m、P6-P7間2.1m、P7-P8間2.2m(平均2.15m)である。なお、P10は確認されなかった。柱穴の規模は径20×27cm～50×65cm、深さ16～48cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。梁行の間柱は柱筋から僅かに内側に入り込んでいるが、柱筋の通りは比較的良好である。柱間距離は部分的に変則的ではあるが、ほぼ一定している。



- SB15**
- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック(0.5cm)・炭化物(0.2~0.4cm)微量 柱痕跡
 - 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック(1.0~1.5cm)やや多 炭化物(0.2~0.3cm)微量 柱痕跡
 - 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック(1.0~2.0cm)多 炭土粒(0.2cm)微量
 - 4 暗褐色土 黄褐色土ブロック(0.2~0.7cm)・黒色土ブロック(1.0cm)少
 - 5 暗褐色土 黄褐色土ブロック(1.0~2.0cm)多 炭土土ブロック(1.0~2.0cm)やや多
 - 6 暗褐色土 黄褐色土ブロック(0.2~0.8cm)やや多 黄褐色土ブロック(0.2~0.5cm)少
 - 7 暗褐色土 炭土粒(0.2cm)微量
 - 8 暗褐色土 黄褐色土ブロック(0.2~0.5cm)やや多
 - 9 暗褐色土 黄褐色土ブロック(0.2~0.8cm)やや多
 - 10 暗褐色土 1層より黒味強 黄褐色土微量 粘性強



第107図 第15号掘立柱建物跡



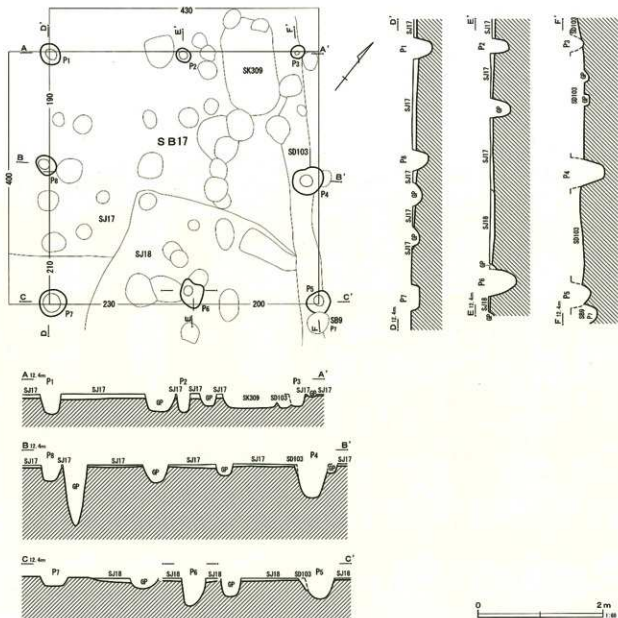
第108図 第16号掘立柱建物跡

遺物は出土しなかった。

第17号掘立柱建物跡 (第109図)

L-7・8グリッドに位置する。第17・18号住居跡を切っているが、第9号掘立柱建物跡やそ

の他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行2間(4.3m)、梁行2間(4.0m)、面積17.20㎡、主軸方位はN-53°-Eである。



第109図 第17号掘立柱建物跡

柱間距離は、桁行P1-P2間2.0m、P2-P3間2.3m、P5-P6間2.0m、P6-P7間2.3m（平均2.15m）、梁行P3-P4間2.0m、P4-P5間2.0m、P7-P8間2.1m、P8-P1間1.9m（平均2.00m）である。柱穴の規模は径20×22cm～40×50cm、深さ15～50cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに小規模である。東側梁行は、柱筋の通りは悪く、P3が内側に入り込んでいる。柱間距離はやや変則的である。2本の柱筋からなる第3号

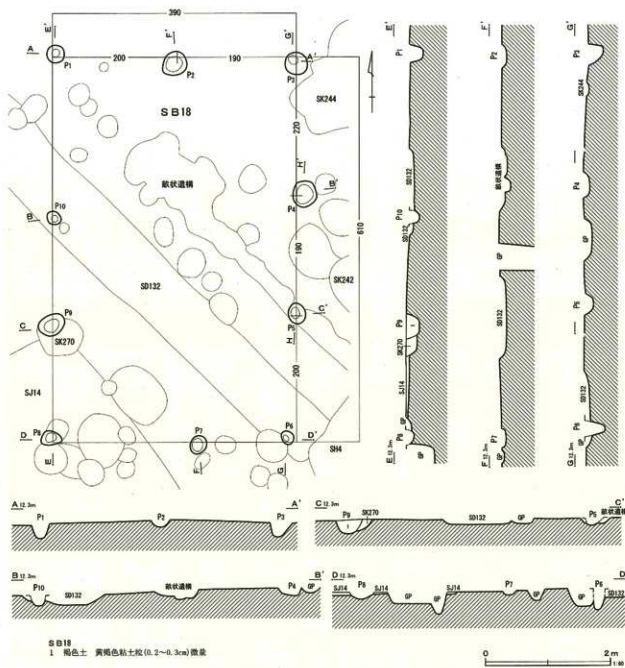
柵列跡（N-54°-E・N-36°-W）と、方位的にほぼ合致している。

遺物は出土しなかった。

第18号掘立柱建物跡（第110図）

M-5・6グリッドに位置する。第14号住居跡、第270号土塼を切っているが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間（6.1m）、梁行2間（3.9m）、面積23.79㎡、主軸方位はN-0°である。

柱間距離は、桁行P3-P4間2.2m、P4-P



第110図 第18号掘立柱建物跡

5間1.9m、P5-P6間2.0m、P8-P9間1.9m、P9-P10間1.6m、P10-P11間2.6m(平均2.03m)、梁行P1-P2間2.0m、P2-P3間1.9m、P6-P7間1.6m、P7-P8間2.3m(平均1.95m)である。柱穴の規模は径20×23cm~38×43cm、深さ8~35cmと若干の幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに小規模である。柱間距離はやや変則的で

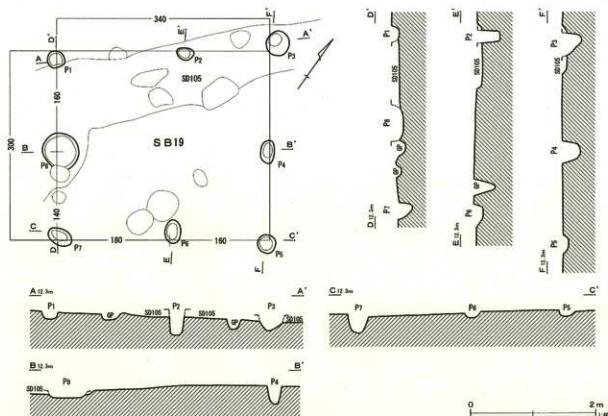
一定しない。

遺物は出土しなかった。

第19号掘立柱建物跡(第111図)

K-7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行2間(3.4m)、梁行2間(3.0m)、面積10.20㎡、主軸方位はN-56°-Eである。

柱間距離は、桁行P1-P2間2.0m、P2-P



第111図 第19号掘立柱建物跡

3間1.4m、P5-P6間1.6m、P6-P7間1.8m (平均1.70m)、梁行P3-P4間1.6m、P4-P5間1.4m、P7-P8間1.4m、P8-P1間1.6m (平均1.50m)である。柱穴の規模は径18×28cm～55×60cm、深さ10～40cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに小規模である。柱間距離はやや変則的で一定しない。

遺物は出土しなかった。

第51号掘立柱建物跡 (第112図)

A-21・22、B-22グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(5.7m)、梁行2間(2.9m)、面積16.53㎡、主軸方位はN-66°-Wである。

柱間距離は、桁行P4-P5間2.2m、P5-P6間1.6m、P8-P9間1.6m、P9-P10間2.2m、P10-P11間1.9m (平均1.90m)、梁行P1-P2間1.5mである。柱穴の規模は径20×25cm

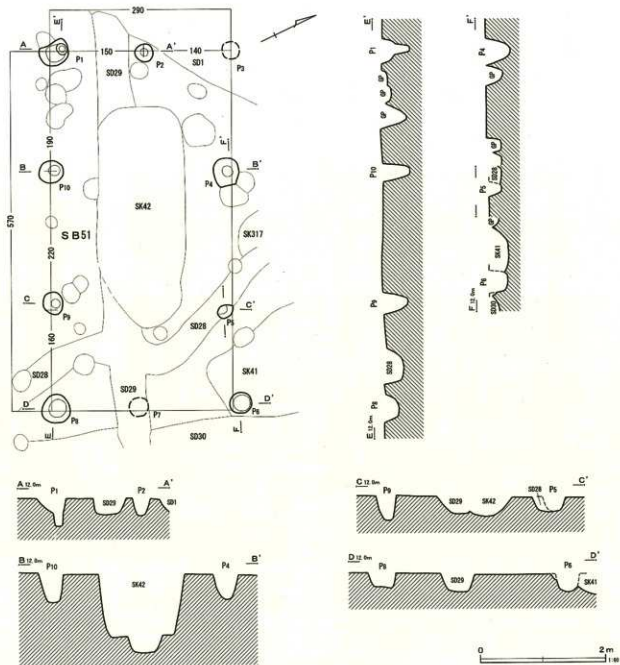
～42×48cm、深さ23～44cmと若干の幅がある。なお、P3・P7は確認されていない。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。径・深度とも小規模であるが、柱筋や柱間距離なども、比較的整っている。

遺物は出土しなかった。

第52号掘立柱建物跡 (第113図)

A・B-21グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(6.7m)、梁行2間(3.4m)、面積22.78㎡、主軸方位はN-25°-Eである。

柱間距離は、桁行P3-P4間2.1m、P4-P5間2.4m、P5-P6間2.2m、P8-P9間2.2m、P9-P10間2.4m、P10-P11間2.1m (平均2.23m)、梁行P1-P2間1.7m、P2-P3間1.7m (平均1.70m)である。柱穴の規模は、径20×20cm～47×53cm、深さ10～45cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、径・深度



第112図 第51号掘立柱建物跡

とも小規模である。西側桁行は柱筋が通らないが、その他の部分では比較的柱筋と柱間距離が整っている。

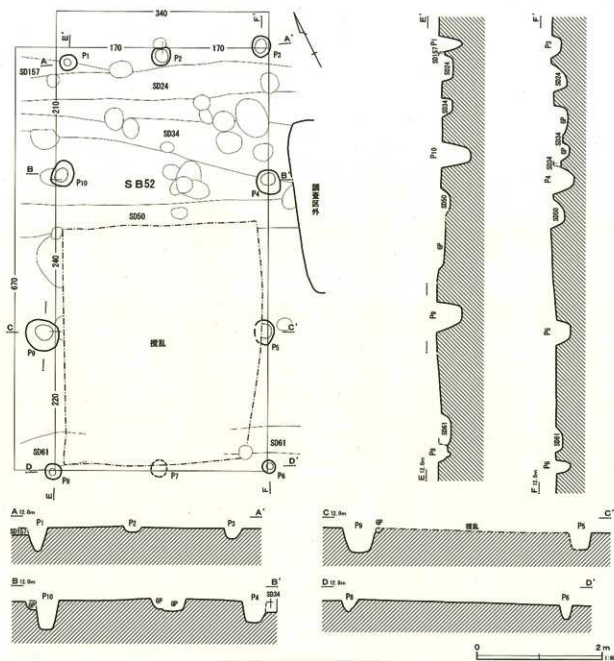
遺物は出土しなかった。

第53号掘立柱建物跡 (第114図)

B-20・21、C-20グリッドに位置する。第54号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間

(6.0m)、梁行2間(2.7m)、面積16.20㎡、主軸方位はN-25°-Eである。

柱間距離は、桁行P8-P9間1.9m、P9-P10間2.3m、P10-P11間1.8m(平均2.00m)、梁行P1-P2間1.3m、P2-P3間1.4m、P7-P8間1.6m(平均1.43m)である。柱穴の規模は径26×29cm～45×50cm、深さ24～65cmと若干の幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形



第113図 第52号掘立柱建物跡

で、径・深度ともに小規模で不揃いである。また、柱筋の通りは比較的良好であるが、柱間距離は一定しない。

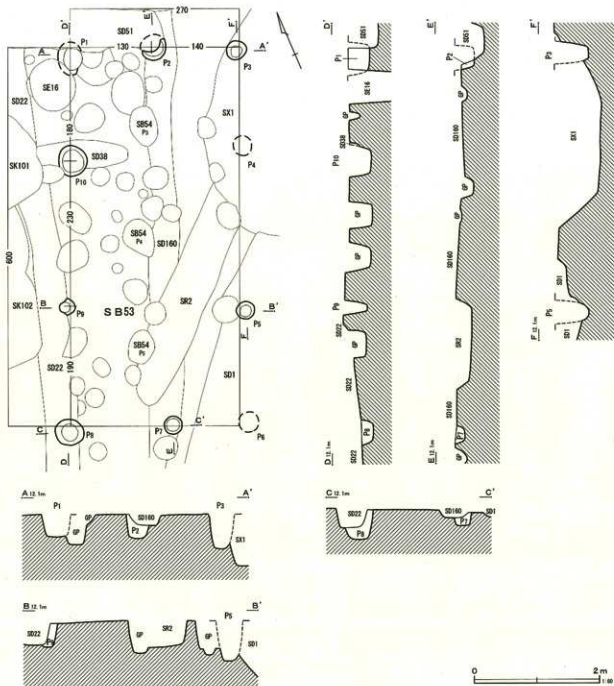
遺物は出土しなかった。

第54号掘立柱建物跡 (第115図)

B・C-20グリッドに位置する。第53号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(5.5m)、梁行は2間(3.3m)と推測される。面積18.15㎡、

主軸方位はN-23°-Eである。

柱間距離は、桁行P3-P4間1.8m、P4-P5間1.9m、P5-P6間1.8m、P9-P10間1.9m、P10-P1間1.8m(平均1.84m)、梁行についてはP2・P7・P8は確認されていないため不明である。桁行の柱筋は通っており、柱間距離も整っている。柱穴の規模は径35×50cm~50×63cm、深さ45~65cmと比較的深い。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。



第114図 第53号掘立柱建物跡

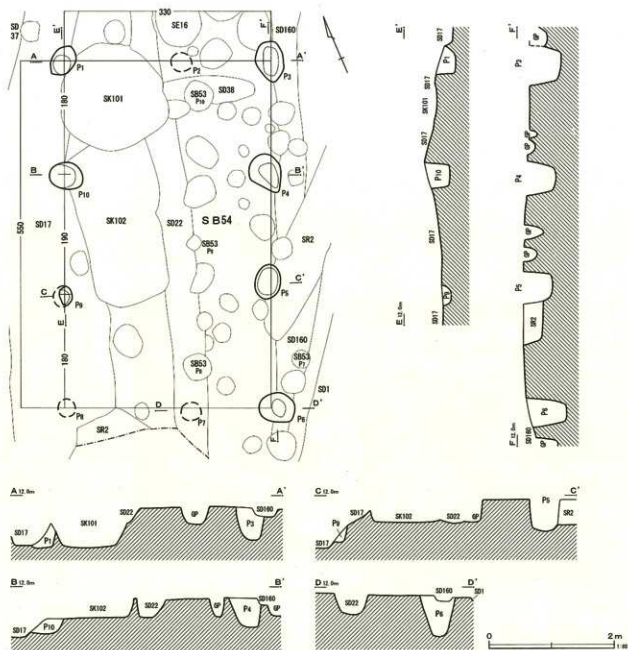
遺物は出土しなかったが、他遺構との重複関係・主軸方位・規模から、中・近世と推定される。

第55号掘立柱建物跡 (第116図)

B-19・20、C-20グリッドに位置する。第2号周溝状遺構を切り、第17号溝跡に切られる。第74号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3

間(5.2m)、梁行2間(3.2m)、面積16.64㎡、主軸方位はN-30°-Eである。

柱間距離は、桁行P4-P5間1.5m、P5-P6間1.7m、P8-P9間1.8m、P9-P10間1.7m、P10-P1間1.7m(平均1.68m)、梁行P1-P2間1.8m、P6-P7間1.8m、P7-P8間1.4m(平均1.67m)である。柱穴の規模は径20



第115図 第54号掘立柱建物跡

×23cm～35×40cm、深さ30～60cmと幅がある。P3は確認されなかった。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で小規模ではあるが、桁行の柱筋は通っており、柱間距離も整っているといえる。しかし、南側梁行の間柱は、柱筋から外側に出ている。

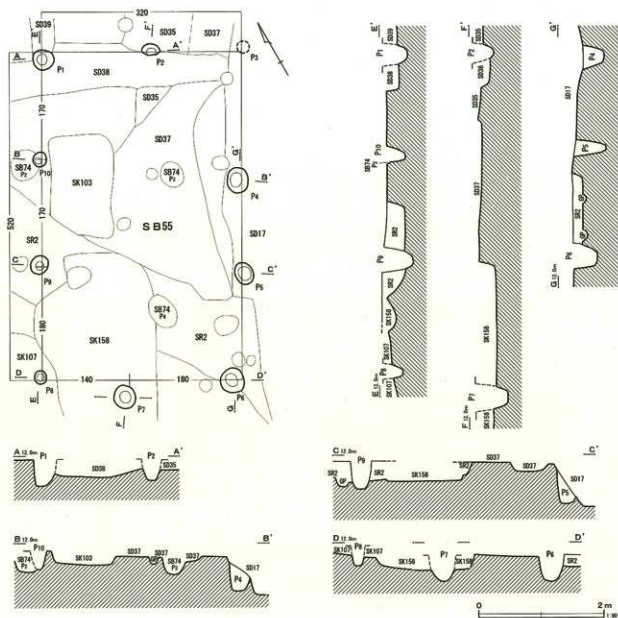
遺物は出土しなかった。

第56号掘立柱建物跡 (第117・118図)

B・C-18グリッドに位置する。第4・6号周

溝状遺構を切り、ピット1基に切られている。その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(6.0m)、梁行3間(5.5m)の総柱建物で、面積33.00㎡、主軸方位はN-11°-Eである。

柱間距離は、桁行P4-P5間2.1m、P5-P6間2.0m、P6-P7間1.9m、P10-P11間2.1m、P11-P12間2.1m、P12-P1間1.8m、P2-P13間2.0m、P13-P16間2.0m、P16-P



第116図 第55号掘立柱建物跡

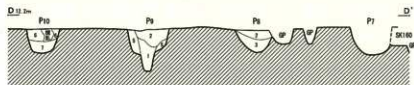
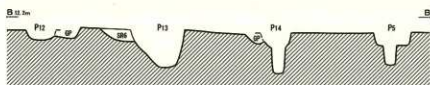
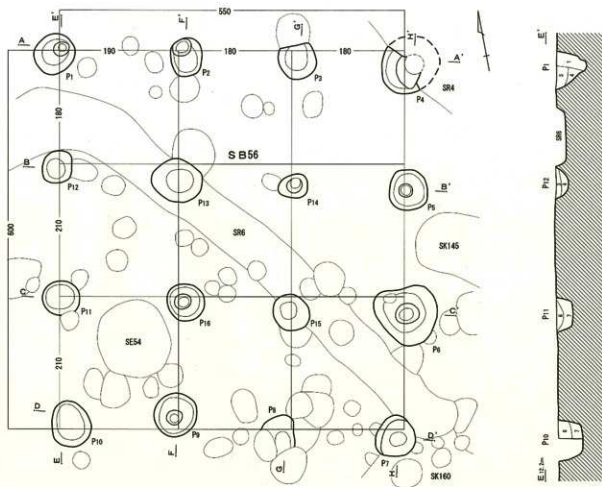
9間2.0m、P3-P14間2.0m、P14-P15間2.0m、P15-P8間2.0m(平均2.00m)、梁行P1-P2間1.9m、P2-P3間1.8m、P3-P4間1.8m、P7-P8間1.9m、P8-P9間1.8m、P9-P10間1.8m、P5-P14間1.8m、P14-P13間1.8m、P13-P12間1.9m、P6-P15間1.8m、P15-P16間1.8m、P16-P11間1.9m(平均1.83m)である。柱穴の規模は径37×46cm～95×103cm、深さ20～72cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。

遺物は出土しなかった。

第57号掘立柱建物跡(第119・120・151図)

C-17・18グリッドに位置する。第7号周溝状遺構、第42・43・48号溝跡を切っているが、第63号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行5間(10.8m)、梁行はP15の存在から2間(4.6m)と推定される。面積49.68㎡、主軸方位はN-64°-Wである。

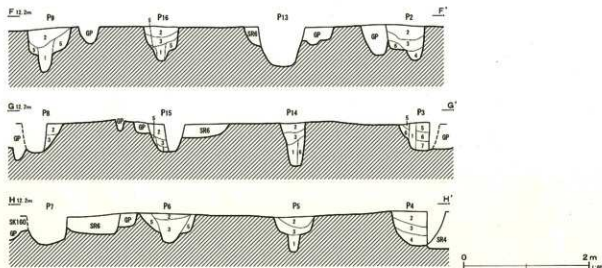
柱間距離は、桁行P5-P6間1.9m、P6-P



- SB56
- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 赤褐色土 | 褐色粘土粒(0.2cm)微量 |
| | 柱状層 | |
| 2 | 赤褐色土 | 褐色粘土粒(0.2~0.5cm)やや多 |
| | | 焼土粒(0.2~0.4cm)微量 |
| 3 | 赤褐色土 | 褐色粘土粒(0.2~0.5cm)少 |
| 4 | 赤褐色土 | 褐色粘土粒(0.2~1.0cm)多 |
| 5 | 赤褐色土 | 褐色粘土粒(0.2~1.5cm)多 |
| 6 | 褐色土 | 地山粒(0.3cm)やや多 |
| | | 黒色土ブロック(0.2~0.4cm)少 |
| 7 | 褐色土 | 黒色土ブロック(0.2~0.3cm)微量 |
| | | しまり肌 |



第117図 第56号掘立柱建物跡(1)



第118図 第56号掘立柱建物跡(2)

7間2.2m、P7-P8間2.3m、P10-P11間2.2m、P11-P12間2.1m、P12-P13間2.1m、P13-P14間2.2m、P14-P1間2.2m(平均2.15m)、梁行P5-P15間2.4m、P15-P13間2.2m(平均2.30m)である。柱穴の規模は径40×60cm～90×115cm、深さ25～55cmと幅がある。P15は、他の柱穴に比べ極端に小規模(径28×48cm、深さ8cm)であることから、床束の可能性がある。なお、P2～P4、P9は検出されず、P15以外にも柱穴が存在したか否かは確認できなかった。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。桁行の柱筋は通っており、柱間距離も整っているといえる。位置的に、第60号掘立柱建物跡(N-65°-W)に平行し、第58号掘立柱建物跡(N-23°-E)に直交する。

P5から、土師器壺(6:8世紀第1四半期)の破片が出土した。

第58号掘立柱建物跡(第121図)

C-17、D-16・17グリッドに位置する。2基のピットを切り、第29号井戸跡に切られる。第59号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(7.2m)、梁行2間(3.7m)、面積26.64㎡、主軸方位はN-23°-Eである。

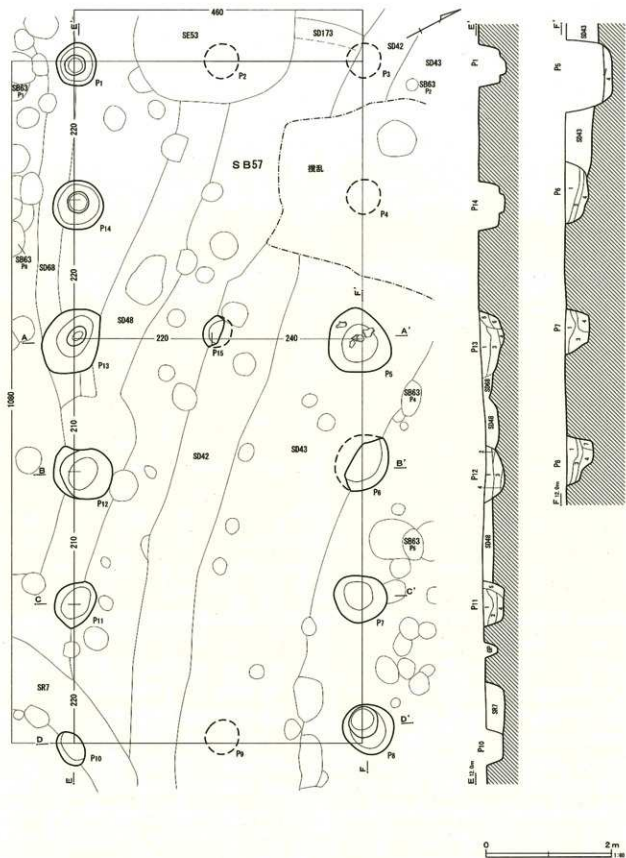
柱間距離は、桁行P3-P4間3.0m、P4-P5間2.2m、P5-P6間2.0m、P8-P9間2.4m(平均2.40m)、梁行P1-P2間2.0m、P2-P3間1.7m、P6-P7間2.0m、P7-P8間1.7m(平均1.85m)である。なお、P10は確認されていない。柱穴の規模は径23×41cm～59×62cm、深さ12～48cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。桁行の柱筋は通っているが、北側梁行のP3が内側に入り込んでいる。また、柱間距離は一定していない。位置的に、第57(N-64°-W)・60(N-65°-W)・63(N-64°-W)号掘立柱建物跡に直交する。

遺物は出土しなかった。

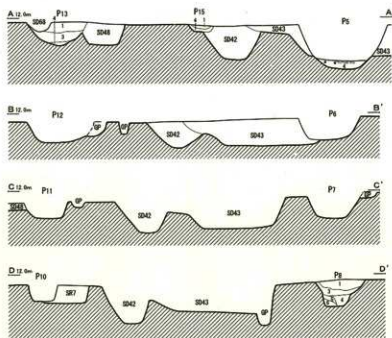
第59号掘立柱建物跡(第122図)

C-17、D-16・17グリッドに位置する。第58号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(5.4m)、梁行2間(3.9m)、面積21.06㎡、主軸方位はN-44°-Wである。

柱間距離は、桁行P4-P5間1.7m、P5-P6間2.0m、P8-P9間1.9m、P9-P10間1.8m、P10-P1間1.7m(平均1.82m)、梁行P1-P2間2.3m、P6-P7間1.7m、P7-P8間2.2m(平均1.95m)である。なお、P3は確認



第119图 第57号掘立柱建物跡(1)



- S B57
- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒(0.2~1.5cm)
・炭化物(0.2~0.5cm)多
 - 2 黒褐色土 黄褐色粘土粒(0.5~2.0cm)
・炭化物(0.2~0.5cm)やや多
 - 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒(0.2~1.5cm)多
炭化物(0.2~0.5cm)
・褐色粘土粒(0.2cm)やや多
 - 4 褐色土 褐色粘土粒(2.0~3.0cm)多
 - 5 黒褐色土 黄褐色粘土粒(0.5~2.0cm)
・炭化物(0.2~0.5cm)やや多
 - 6 黒褐色土 黄褐色粘土粒(0.2cm)少
 - 7 褐色土 黄褐色粘土粒(0.8~1.5cm)やや多
炭褐色粘土粒(0.2~1.0cm)多



第120図 第57号掘立柱建物跡(2)

されていない。柱穴の規模は径25×32cm~58×60cm、深さ8~42cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。北側梁行のP1・P2を除いて、柱穴は径・深度ともに小規模ではあるが、柱筋は比較的通っている。柱間距離については、多少のばらつきがみとめられる。位置的に、第57(N-64°-W)・63(N-64°-W)号掘立柱建物跡に平行し、第58(N-23°-E)号掘立柱建物跡に直交する。

遺物は出土しなかった。

第60号掘立柱建物跡(第123・124図)

C・D-18・19グリッドに位置する。第3・7号溝状遺構、第42・43号溝跡を切っているが、第73号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行4間(7.4m)、梁行2間(4.7m)、面積34.78㎡、主軸方位はN-65°-Wである。

柱間距離は、桁行P3-P4間1.6m、P4-P5間1.8m、P5-P6間2.0m、P9-P10間1.4m、P10-P11間2.6m、P11-P12間1.4m、P12-P1間2.0m(平均1.83m)、梁行P8-P9

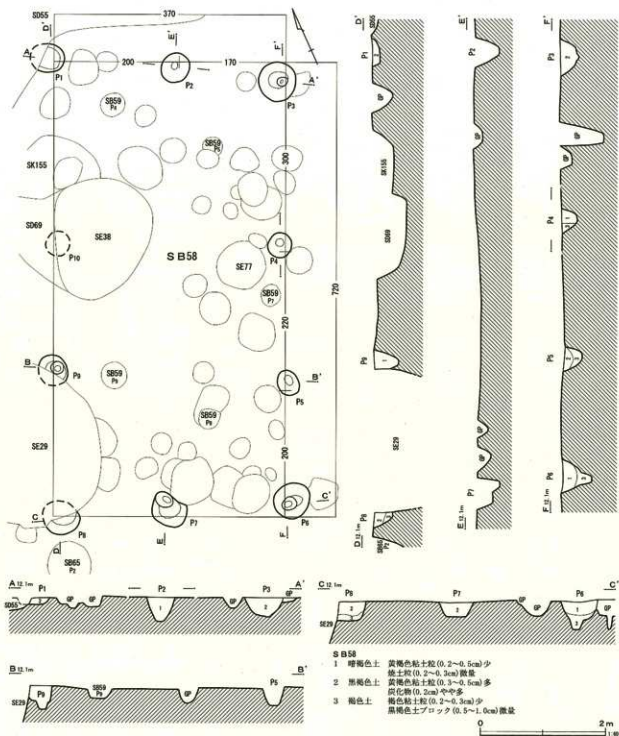
間1.9mである。なお、P2・P7は確認されていない。柱穴の規模は径26×31cm~53×55cm、深さ8~56cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で全体的に径・深度は小規模である。桁行の柱筋は比較的通っているが、東側桁行のP6が若干内側に入り込んでいる。また、柱間距離は一定していない。位置的に、第57(N-64°-W)・63(N-64°-W)号掘立柱建物跡に平行し、第58(N-23°-E)号掘立柱建物跡に直交する。

遺物は出土しなかった。

第61号掘立柱建物跡(第125図)

D-17・18グリッドに位置する。ビット1基を切り、第27・52号井戸跡に切られている。その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(6.0m)、梁行2間(4.1m)、面積24.60㎡、主軸方位はN-51°-Eである。

柱間距離は、桁行P5-P6間1.5m、P8-P9間1.9m、P9-P10間2.4m、P10-P1間1.7m(平均1.88m)、梁行P1-P2間2.1m、P2

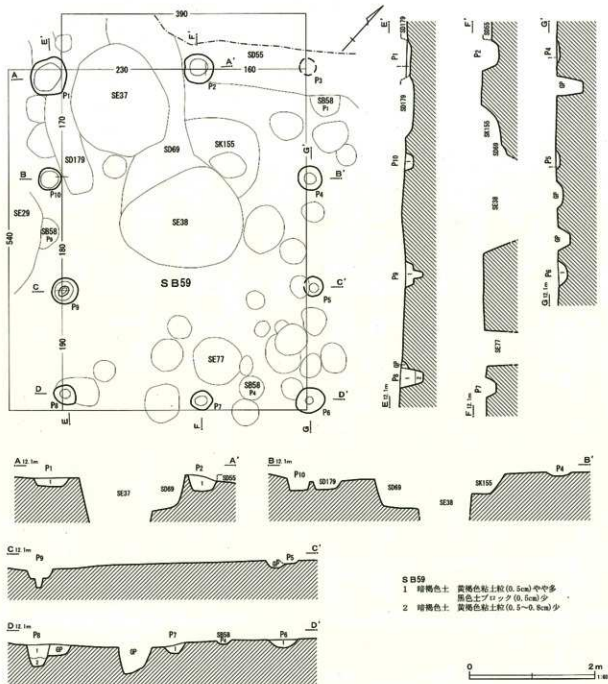


第121図 第58号掘立柱建物跡

—P3間2.0m(平均2.05m)である。なお、P4・P7は確認されなかった。柱穴の規模は径30×35cm~50×60cm、深さ5~25cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で全体的に径・深度はやや小規模である。桁行の柱筋は比較

的通っているが、東側桁行のP3が若干内側に入り込んでいる。また、柱間距離はばらつきがあり一定していない。

遺物は出土しなかった。



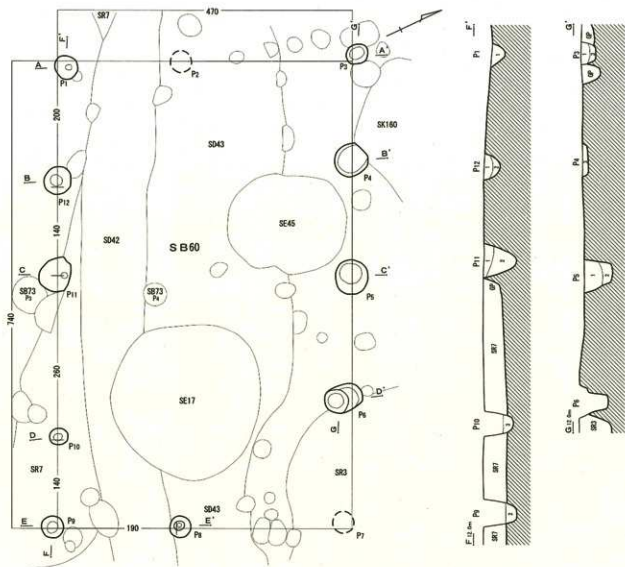
第122図 第59号掘立柱建物跡

第62号掘立柱建物跡 (第126図)

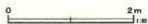
B-18グリッドに位置する。第4号周溝状遺構を切っているが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行は1間のみの検出である。梁行2間(2.4m)、主軸方位はN-25°-Eである。

柱間距離は、桁行P1-P2間1.5m、P3-P

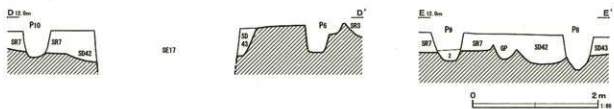
4間1.5m(平均1.50m)、梁行P4-P5間1.3m、P5-P1間1.1m(平均1.20m)である。柱穴の規模は径40×45cm~50×55cm、深さ30~55cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、確認された範囲内では柱筋は通っており、柱間距離はほぼ一定している。遺物は出土しなかった。



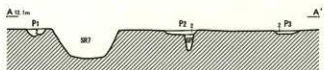
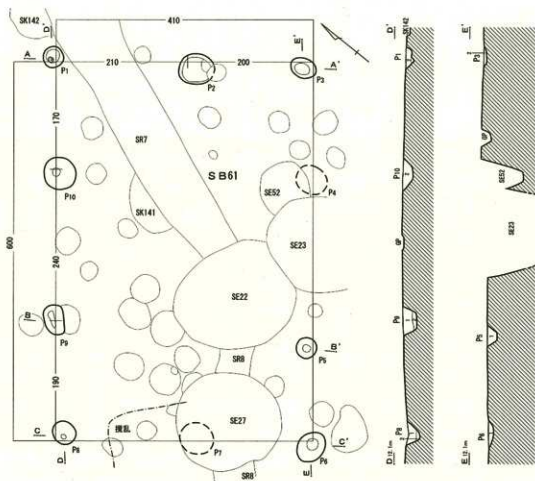
- SB60
- 1 黑褐色土 黄褐色粘土粒(0.2~0.5cm)多
褐色粘土粒(0.5cm)个不多
面化层(0.5cm)少
 - 2 黑褐色土 黄褐色粘土粒(0.2~0.5cm)少
褐色粘土粒(0.2~0.5cm)数量
 - 3 暗褐色土 黄褐色粘土粒(1.0cm)多



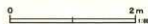
第123图 第60号独立柱建物跡(1)



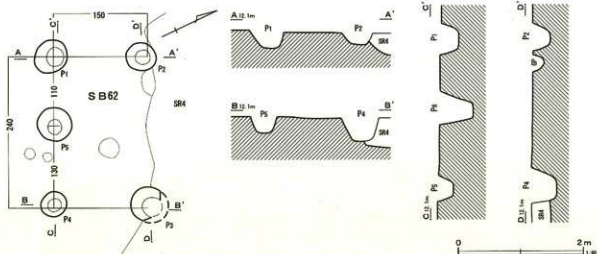
第124图 第60号掘立柱建物跡 (2)



- S B 61
 1 暗褐色土 黄褐色粘土層(0.2~0.5cm)少
 2 暗褐色土 黄褐色粘土層(1.0cm)多



第125图 第61号掘立柱建物跡



第126図 第62号掘立柱建物跡

第63号掘立柱建物跡 (第127・128図)

C-17・18グリッドに位置する。第42・43号溝跡と1基のピットを切り、第53号井戸跡・ピット1基に切られる。第57号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(7.3m)、梁行は不明(6.4m)、面積46.72㎡、主軸方位はN-64°-Wである。

柱間距離は、桁行P4-P5間2.3m、P6-P7間2.5m、P7-P8間2.2m、P8-P1間2.6m(平均2.40m)、梁行は両梁行とも間柱が確認されていないため不明である。なお、P3は確認されていない。柱穴の規模は径18×20cm～50×75cm、深さ15～45cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、全体的に径・深度はやや小規模である。桁行の柱筋は比較的通っているが、柱間距離は若干ばらつきがあり一定していない。位置的に、重複する第57号掘立柱建物跡(N-64°-W)と方位が同一である。また、第60号掘立柱建物跡(N-65°-W)と並行し、第58号掘立柱建物跡(N-23°-E)に直交する。

遺物は出土しなかった。

第64号掘立柱建物跡 (第129・151図)

D-17、E-17・18グリッドに位置する。第8号周溝状遺構を切り、2基のピットに切られる。

その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(5.3m)、梁行2間(4.4m)、面積23.32㎡、主軸方位はN-62°-Wである。

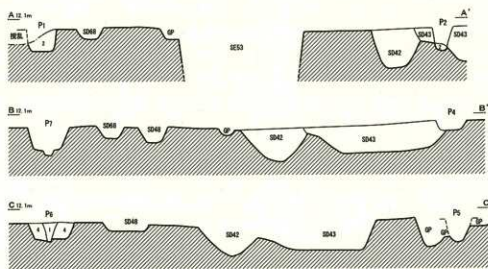
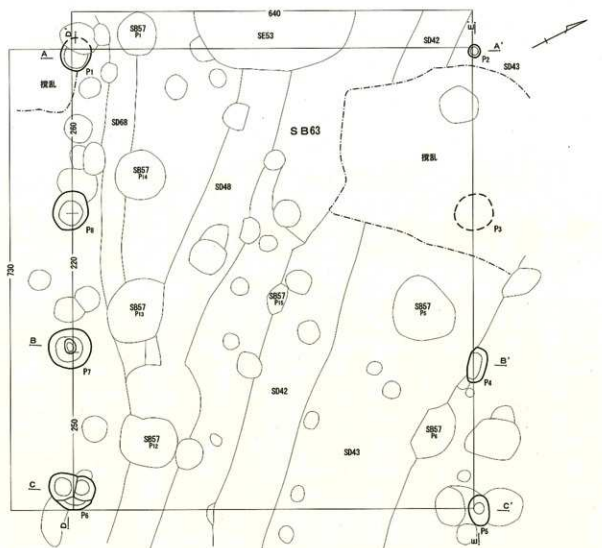
柱間距離は、桁行P3-P4間1.6m、P4-P5間1.9m、P5-P6間1.8m、P8-P9間1.6m、P9-P10間1.6m、P10-P1間2.1m(平均1.77m)、梁行P1-P2間2.2m、P2-P3間2.2m、P6-P7間2.1m、P7-P8間2.3m(平均2.20m)である。柱穴の規模は径20×25cm～65×70cm、深さ15～45cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で全体的に径・深度は小規模なものが多い。桁行・梁行ともに柱筋は比較的通っているが、柱間距離は若干のばらつきがある。

砥石(7)が1点出土した。

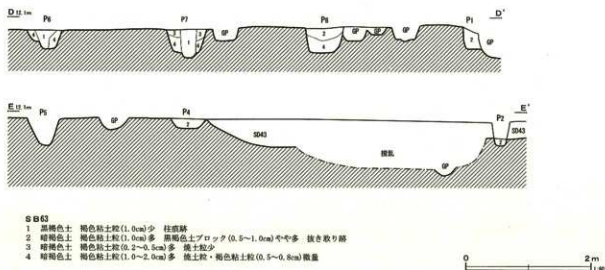
第65号掘立柱建物跡 (第130図)

D-16・17、E-16グリッドに位置する。第54号溝跡を切っているが、第66・80号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(6.8m)、梁行2間(3.9m)、面積26.52㎡、主軸方位はN-22°-Eである。

柱間距離は、桁行P3-P4間2.9m、P4-P5間1.8m、P5-P6間2.1m、P8-P9間2.1



第127图 第63号掘立柱建物跡(1)



S 63

- 1 黒褐色土 褐色粘土粒(1.0cm)少 柱痕跡
- 2 暗褐色土 褐色粘土粒(1.0cm)多 黒褐色土ブロック(0.5~1.0cm)やや多 抜き取り部
- 3 暗褐色土 褐色粘土粒(0.2~0.5cm)多 塵土粒少
- 4 暗褐色土 褐色粘土粒(1.0~2.0cm)多 塵土粒・褐色粘土粒(0.5~0.8cm)微量

0 2m
1:1

第128図 第63号掘立柱建物跡(2)

m、P9-P10間1.9m、P10-P1間2.8m(平均2.27m)、梁行P1-P2間2.0m、P2-P3間1.9m、P6-P7間1.9m、P7-P8間2.0m(平均1.95m)である。柱穴の規模は径50×54cm~66×68cmで近似しているが、深さは17~54cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。柱筋は比較的通っているが、柱間距離はばらつきがあり一定しない。

遺物は出土しなかった。

第66号掘立柱建物跡(第131・132・151図)

D・E-16・17グリッドに位置する。第54・74号溝跡を切っているが、第65・80号掘立柱建物跡やその他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(6.6m)、梁行2間(4.8m)、面積31.68㎡、主軸方位はN-70°-Wである。

柱間距離は、桁行P3-P4間1.8m、P4-P5間2.8m、P5-P6間2.0m、P8-P9間2.0m、P9-P10間1.9m、P10-P1間2.7m(平均2.20m)、梁行P1-P2間2.9m、P2-P3間1.9m、P6-P7間2.1m、P7-P8間2.7m(平均2.40m)である。柱穴の規模は径28×35cm~100×120cm、深さ13~70cmと大きく幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、桁行・梁

行ともに柱筋は比較的通っているが、柱間距離はばらつきがあり一定しない。

焙烙(8)の破片が出土したことから、近世の掘立柱建物跡と推定される。

第67号掘立柱建物跡(第133図)

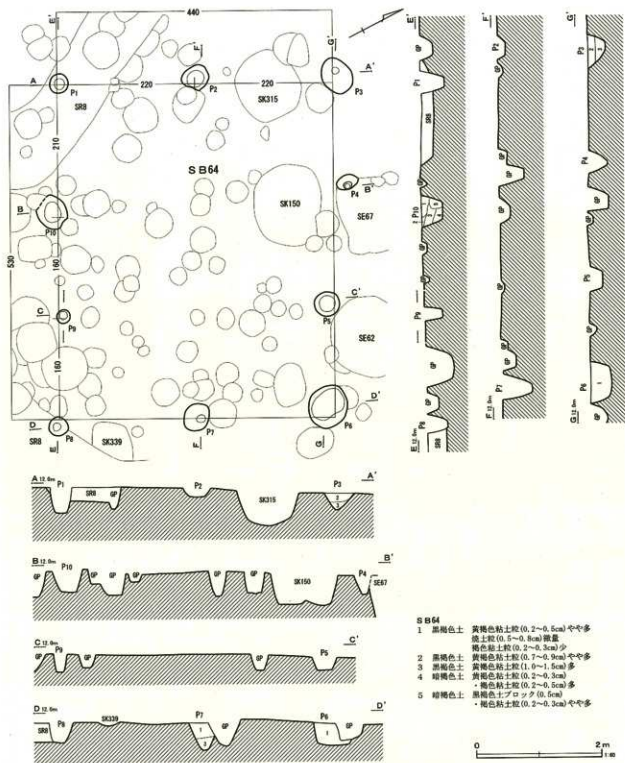
F・G-17グリッドに位置する。第72号井戸跡に切られている。その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。母屋の規模は、桁行3間(6.1m)、梁行2間(3.8m)、面積23.18㎡、主軸方位はN-52°-Eである。

柱間距離は、桁行P4-P5間2.0m、P5-P6間1.9m、P8-P9間2.0m、P9-P10間2.0m、P10-P1間2.1m(平均2.00m)、梁行P1-P2間1.9mである。なお、P3・P7・P10は確認されていない。柱穴の規模は径25×27cm~40×52cm、深さ4~34cmと幅がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で全体的に径・深度は小規模である。桁行・梁行ともに柱筋は比較的通っており、柱間距離も近似している。

遺物は出土しなかった。

第68号掘立柱建物跡(第134図)

D-15・16グリッドに位置する。第130号土塙を切っているが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

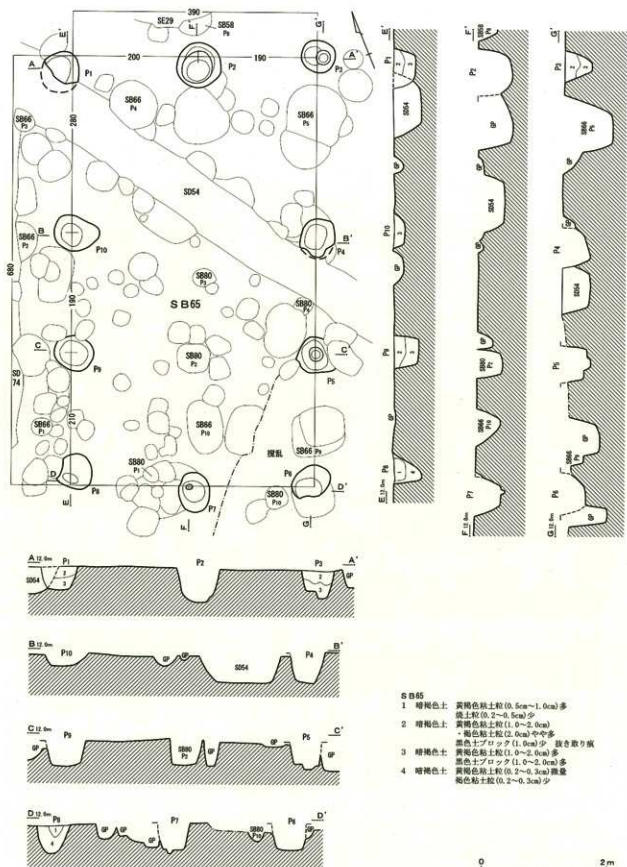


第129図 第64号掘立柱建物跡

この掘立柱建物跡は、桁行3間(5.3m)、梁行3間(4.9m)のように見受けられるが、西側桁行の柱穴は若干小振りて深度もやや浅いことから2×3間の母屋に、廂のつく建物跡と推定される。

その場合、梁行2間(3.5m)、全体の面積25.97㎡、母屋の面積18.55㎡、主軸方位はN-66°-Wである。

柱間距離は、桁行P3-P4間1.7m、P4-P



第130図 第65号掘立柱建物跡